

ネット詩集

若き日の探求



瀬川紀雄

目 次

【第一部 大学時代】

美の覚醒	3
一行詩	6
ミリーナ 4	7

6つの詩片

寸言 4 片	9
作品 1	10
作品 2	12
小品——私と私の戦い——	14
小さな作品 ₁ ——ひとつ～	17
小さな作品 ₂ ——在られて～	20

【第二部 大学卒業後】

桜の輪廻	21
林檎の宇宙	35

5つの樹の詩

ライラックの日常	39
桐の理想	42
つつじの平凡	46
さつきの文明	50
バラの孤高	54

3つの詩

落葉	58
季節のはずれ目	60
硝子の間	64

8つの詩

朝の前、帰った朝	67
雪の弁証法	69
初雪の街	72
思想の壁	74
分校の秋	75
内は外	76
黄昏	78
もろい歩み	79

4つの詩片

4つの断片	81
反射	84
爆発	85
しようがなく	86

24の詩

街	87
すべてを越えて	89
小石	91
足洗い	92
階上岳と私	94

枯れ池	96	青の消滅前	141
長い夜に一瞬の昼	97	いつまでも降りしきり	143
海岸にて、凡学者から	99	<u>【第三部 大学以前】</u>	
東風	101	春陽	146
季節のすき間	102	死相	148
宇宙の冬	105	田園	150
光の奥	107	別れ	152
幻雪	109	津軽の春	155
雑草	111	老婆	157
闇の韻	113	滅亡	159
あの子は	114	無意識	160
霧は流れず	116	美	161
津軽のソルヴェーグへ	118	運命の傀儡	162
晩秋の二度目の雪に誘われて	120	初恋のメルヘン	166
ただ通り過ぎたくて	122	太陽讃歌	168
無題（闇の桔梗）	125	朝のシンフォニー	169
裏庭の詩	126	楽園の夢	171
宵闇の告白	126	死園	172
花鳥風月	131	追憶の楽園	174
3つのヴァリエーション	133	<u>3つの無題</u>	
<u>5つの詩</u>		無題（孤独）	175
蟠り	135	無題（悲劇）	177
雪の小径を	137	無題（恐怖）	178
緑の U ターン	139	あとがき	180

【第一部 大学時代】

美の覚醒

I

狂気じみた暴走、腐敗した悪臭の埃塵を立ち込め
掻き回された汚穢が入り混じ合うように、
醜態な瘦身者達の群れ
病んだ紅の蒼穹の下、地の亀裂からの熱い噴煙の中
地獄の、底のない嘔吐物の泥濘を、どすぐろい血の飛瀑を
壊血病者の熾烈な流血の、当てもない瞬間の永遠の狂奔
無垢の呵責に燃え落ちる慚愧、蠅が執拗に追い纏う、
醜くむくんだ腐臭の頬へ
息苦しく喘ぐ慇懃、蛭がべったりと食いつき吸血する、
汚い粘液に溶かされて蹣跚とした四肢を
空しさに嗚咽する允許、蛆が咽へ放出する嘔吐物を吐瀉する、
黴がはえ錆び付いた空虚な胸に
咳き込み喀血する詭弁、蠍が無遠慮に忽然と刺し、
苦い血みどろの口腔から
神経の激痛に昏倒する銜学、蜘蛛が八地獄の爪で掻き乱す、
粘っこい蜘蛛の巣のはった脳の
火を熾せない臆病な蒼氓、俺は只管に狂奔する
無限の落魄、底のない生臭い血の沼に、果てのない狂おしい暗闇に

俺の後の俺達も次々と没落する、絶叫！ 悲惨な葬送曲
“懺悔の皆無な殺意、露骨な欲情、それこそ美の真髓だ！、”
“醜悪への嫉妬、美への憎悪、これこそ血と肉だ！、”
“永遠に持続する吐き気、それが生きることだ！、”
血の沼に、狂気の闇に、片端の群衆の暴走
頽廢な継続、狂気の逃走、無の歯痒さから
俺を噛み殺し、どす黒い血に毒殺しながら
俺に吐瀉物で縊死され、腐臭に窒息されながら

全裸斑文だらけの閉塞者達の、死魔にわななくように
血飛沫の氾濫に
地獄に叫喚する餓鬼達の、辛酸を舐める煩悶の狂態に
臓腑のこそばゆい軋り、俺達は狂奔する、
飢えた老婆が泥を嘔み下すように
突然、酷痛が全身を襲い、蛙の醜い足に重苦しい毒鎖を
苛立たしい狂気の飛端の残滓、悪臭放つ屑
俺達の病骨も幻想に、俺は疾風の傀儡のごとくよろける
酷烈な痛痒を生む猛毒に昏倒し、地に砂を噛み蹴き這い回る
至死への難渋、断腸の死苦、
苦痛の手錠を解こうと臓腑を噛みちぎる
至愚の狂乱の奔走、俺達の俺に突然の酷痛が、昏倒！
俺も、そして俺も、竟に最後の俺も、砂を噛み地に蹴き這い回る
一面血泥の沼、腸の無惨な死屍
忽然と、激昂した地獄の熱い狂風が奇襲する

死屍に血飛沫の狂舞

終焉、奇臭の凄絶な終焉、俺の終焉.....

II

血塗れな悪夢からの、疑瞞な覚醒

癩病者の醜穢な首が狭い胸の中に乱舞する

神経を血迷わせる吐瀉を道連れに

最早、静謐は大地を凍えさせる死屍と変貌した

覚醒、狂気の牢獄への永遠の逃避

進取と退嬰を老病の枝垂れ柳に縊死させた

虚無の偽善から、哄笑の無から

吐瀉して時間の壁の弱いその汚物に忽然と洩面を埋めた

鼻孔をどす黒い血で塞ぎきる悪臭

病菌が狂舞する泥を舐めた

口腔を悪臭放つ吐瀉物で塞ぎきる奇味

俺は蘇る、悪の粘つく美を母胎に、死の蘇えに

熾烈な欲情の泉、骸骨があけに塗って倒れる朝ぼらけ

過去の臓腑を口唇を血染めに噛み砕き

碌々たる美はどろどろの醜悪の目睫に凋落する

悪魔が糞尿、歯牙を震駭さす汚穢と

舌根を噛みちぎる汚穢を血と肉とし

もつれあう跛行に粘っこい偏執に、永遠にとぐろを巻く
無聊な虚ろ目に、既に真紅を忘却した蒼白な焼きごてを押し込め
絢爛たる無垢な脳を、魔女と野獣の爪牙で掻き回す
病んだ胸が亀裂する凄まじい嗚咽
骨っぽい背中にべったりと重く押し掛かり
後頭部を天空を血濡れにするまでに噛みつく過去の絶望に
大地の汚穢に法悦の震撼を呼ぶ、狂気じみた呻吟
悪夢が馘首の血の臭いの遅滞への焦燥に
毒気の爪が無遠慮に皮膚を剥ぎ肉を引きちぎり
病的に歪んだ口唇が生霊の血を吸い込む
没落、底のない陥穽に無限に没落、血濡れた地獄に

昭和 46 年 12 月

底のない絶望の陥穽を象徴する暗闇に

一行詩 47 年

不安と孤独が憂鬱に無限に没落する

ミリーナ 4

—— 目の前には何もなく ——

絶えまない弦のか細い曲線、時間の
人影のない一日の終焉、それは冷たく固く
寂しく待つ、灰色の映像にオレンジ色の滲むのを
闇と街灯に彷徨う、十日の菊にユダの泪
憂愁な琴線を凍え死にさせて
至高のバラの騎士、今は未熟な北国の荒地の息吹
白髪な孤独な瞳を揺らし、はみだされた感覚を震え上がらせ
一瞬にして、影のまん中を、鋭く白い直線が
暗闇が、一雫の光さえも戯れることなく
目睫の微笑みは、完全な夢なままに……

罪の子、永遠に彷徨う白雲
最後の審判への扉、すでに固く冷たく
何ごとも起こらないかのように閉ざされたのは、^{あした}明日の生
美の女神が浮く硝子窓
闇よりも暗く塞され、哀愁の帯びた^{フルート}横笛までが
母胎の揺り籠、古馴染みのユトリロの街頭に
23, チリーン、黄、涙そして風と海
だが、^{クアンバス}貧困が画布を破けた古新聞に
一本の髪の毛が、……復活

古風で荘重な一音、シューマンのパリの架橋に
青い崇高な鼻筋、赤く深い瞳、緑色の引き締まった口唇
いつも水面に、深い緑を帯びた神秘的な
憂鬱な暗闇に今は
冷たく白い孤独な街灯だけが……

激しく窓を打つ雨音、地獄の悪魔の黒い手が
永遠に続くリズム、小さな心臓がぎこちなくジャズる
夢の外へと無遠慮に引き離す、一人だけの列車
もはや何も聞こえない、見えない ……何もない
永遠の流れ、永遠の静止、意識のない微光の……

48.3.20

6つの詩片

寸言4片

罪は悪でもなければ善でもない。結果ではなく内面において在るのであり、罰せられようが何されようが罪そのものであるだけにすぎない。

すべての真に思索創造する人間は、既成の思索・創造の限界を超えたところに在るのではなく、単に個人的反抗・自己独立のための感情内にあるだけである。そこに必然的に新たな思索・創造が付随されることになる。しかしそれは、自らが意識できる思索創造的人間の本質の二義性でしかない。

世界歴史は、因果律も弁証法もないがために、事実の原因のない結果の羅列という単なる現象にすぎず、真の存在は、個々の時代の個人個人の感情のみである。

人間はなぜ生き続けるのか？ 単独者としての自己のために、次にただひとりの人のためにだけである。その故にのみ思索し、創造する。

48年

作品 1

自室にひとり

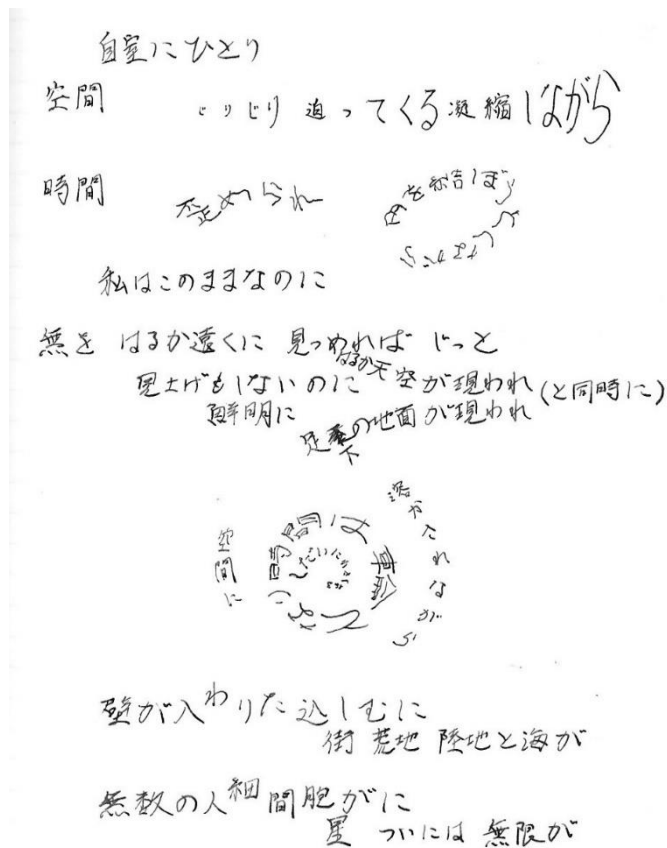
空間 じりじり 迫ってくる 凝縮しながら

時間

歪められ
私はこのままなのに



【以下、ワードでの表記は難しいので、手書き原稿の画像を用いる】



空間と時間はおだけになった
瞬間！ くだいに
私は小さくなる

無限の 終わりの無限
瞬間！

進むに返るは私のかた
まためやをりが広は間空りま止は間時
腔細はに外 界せたいさに返るに内

止静に遠永
かなしえ振は色 り光は音
進むに限無

49.12.7 (1974)

作品 2

今ここに在ることにはた

時間を殴った
空間がひび割れ
空間をよめた
時/日/月が膨張し

私は分裂しながらに拡散

光 {華麗} → 闇 → 透明
音 {饒舌} → 単調 → 沈黙

無

自己存在の喪失
からの自由

↓
自己と世界の一体

↓
存在 世界の寂寥そのもの
認識 寂寥から演繹的帰納
(形のない破壊的建的)
寂寥 一概成逆説の媒介的実在
逆説の無意味
逆説非存在

過去を生き過み未来を死に埋め... 可

現在即無 かつ可

実在物は重なりあい觀念は石化し生み出て... 可
延長即無 かつ可

ここにのみならずあそこにも在り
今のみならずいつかにも有り
すべてに死し生り死に有り

死生令わセ

(死 生 死 生 死 生)

シァ!

幸わセ

問 幸って?

答 肯定

一切肯定! が

たにひにうら純に生り

49.12.15 (1974)

小品 —— 私と私の戦い ——

なることの戦いに、ついに
私をつっこみ
私は脳の中
もつかまえて
観念を 否！
手を取られた
そして私を引っ張り
引っ張り飲みこんでしまった
いつの間にか観念が肉体となり
私は脳の中にいた

—— 脳の中の生活での日記より ——

無限月即日

脳の中は無限の空間だ。愛色・智色の変化による無限の色彩。瞬間が永遠であるような時間だ。愛音・智音の ^{ヴァリエーション} 変奏 による無限の和声 ^{ハーモニア}。そしてその空間全体が私そのものであり、私は私の隅々まで見透すことができる。その時間全体が私そのものであり、私は次々と誕生し続ける。拘束する何ら壁はない。静止する何ら死はない。苦痛を知らない快樂そのものであり、あらゆる欲望がすべてかなえられる自由

そのものである。私は私を愛し、愛される私は愛する私を愛し、私は愛である。私のすべては真であり善であり美である。ああ、無であって全世界であるこの幸福！

最終月末日

突如、観念の肉体は疲れてか叫んだ。＜椅子！＞しかし私は椅子のみを創るのが趣味ではなかった。私にはその叫びが一瞬のことでしかなく、私は私自身を楽しみ続ける。あらゆるものを同時に創りそしてそれを楽しんでいる。確かにそのひとつに椅子もあるが、椅子はすべての中の椅子であり、椅子のみではない。それゆえ、肉体には椅子が見えなかったにちがいない。とにかく私は楽しみ続ける。私自身を。すべてを。ああ、幸福！

あっ！

気がつくと

私はもとの私だった。脳の中には観念が戻っていた。

どうやら観念の肉体が、あらゆるものに疲れてついに

発狂しては脳の私を襲ったらしい。

もはや今の私は観念に左右されることがないように、
再びこの生を戦い続けていかなければならない。その
先が、恐らくは何度も脳の中に逃避することになろう
と、絶望や寂寥であっても、この生を戦い続けていか
なければならぬ。が...

50.1.8

小さな作品₁

——ひとつふたつのせかいにせかいそのままに——

(しとし あるは しとし あるは
しとし なわち あるし)

し

しは

しとは

しはなに

しとはなに

しとはなにか

しとはしに

しはしに

し しにに

しら しに

しのし し

しらのし

しらのしら

しらなるしら

しらなりし

しらはし

し しはし

しす しく

しする し

しするし
ししすぎる
ししづぐるし
ししなさず
しすれず
しせず
しず
し

し
しい
ししい
ししげな
しいらしい
ししげらしい
ししげない
ししない
し し ない
しく しい
ししく し
ししげに
しいらしく
ししげらしく
ししげなく

ししなく
！ しなく
し！ しく
しあ！ し
しんと！
しらしあ！
しんとしあ！
しうむっ...
しむっ...
しっ...
し...
...

50.2.5

小さな作品₂ ——在られて有り生る倫理——

あられてありあるりんなりりなり
なんにあられるありあるや
なんにもいわれんなんになり
たんにあられてあらんりろんなし

ありなるあるはなんなりや
あられてかんにあるなるあり
あるなるあるはなんなりや
あられてかんにしんにあるなり

りんあるはりはりろんなし
りんじんにれんかんなしりんりと
ありある あられて きびし

しんのあんになりはりんなるに
ありありあらわれるしんらしいなり
あられてありあるりんなりりなりに

(注) かん：時間・空間の間と観と感

しん：心と真

・ ・ ・ (傍点) 淋

あん：安と暗

50.3.1

第二部 社会人以降の詩

桜の輪廻

一

桜の輪廻

キリスト降誕祭

正月

よりも華麗な生のわけめ

が

過去と過去同様な未来との

無意味なわけめ

それは大地に浮いた桜の花びら

自然を看板に

文明の繁雑と均一化

から逃避しようと

無自覚に

機械的に

“大衆の反逆、”

その黒い情報が頭上を隠蔽する

春の天空に代わって

頭上の自然の光があまりにも眩しいために

おお偽りの春の到来！

冬は素朴な沈黙を保持していたのに

“ mixing Memory and desire „

記憶の沈黙

をもそれ化していく

労働の抑圧から逃れ

その喜びと意義を問わずして

家庭での対話の喪失への呵責から逃れ

その ” 我と汝 „ との関係での反省せずに

大衆へ騒音へ

沈黙への関係におそれおののいて

大衆へ騒音へ

人口の針葉樹は

樹林と桜花の蜜を求めて

樹林へ蜜へ

アームカエイレールナーニモナークアールハターダー

人口樹林

水蜜

ああここにも

没我汝沈黙表層対話喪失

労働者世帯主家庭報酬労働抑圧

物質日常生活延長

ああここにも

沈黙の関係が樹林の根を刺し責める

大衆の労働現場

大衆家庭

言わずにはいられない無意味な喧噪

隣目の関係から逃れるために

対従と策略の言語

倦怠と狂暴の混合した行動

麻痺した知覚

無生産な思考

じゅりんすうぶんにぶんかしぶんれつさせられられ

歯車化機械構造

自由操作歯車化

時間空間即物体

現象内炸裂膨張

さくら祭り

夕日に風の

ささやきて

湖水のおもて

風の花追う

おわれ～てかえる～は～

翌朝目がさめ

日常生活にもどった

時

のふくらんだ大衆が

ここに浮いている

だけだ

桜の輪廻

華麗な生のわけめ

無限な時空の

がそれははかない夢

水輪のように音もなく

それは大地に浮いた

桜の花びら

二 - 1

おさない

ひ

の

さくら

は

ぶとうかい

ははのて

につれられられて

みなのなり

は

すっきりさっぱり

あこがれのゆめぶとうかいじかんへ

てつどうばしやにゆれ

かかしいなかからとかいくうかんへ

おさなごころまごころのころはゆれ

鉄道馬車は走ります

舞踏会の華へ走ります

ガッタンゴットンガッタンゴットン

時間を追い越し走ります

空間を切って走ります

路傍の花生娘と遊女

この日はお化粧

遠くは清純近くはなまめかしく

恥じらいと誘惑が微笑む

社交術と礼儀作法の教師

タキシードと軍服を着た

電信柱たちが迎え出る
行列を作って規則正しく
鉄道馬車は走る
伝統をまっすぐ走る
人生行路を一目散に走る
小川の時刻むよりも大声で流れ
風の広がりよりも早く吹き
鉄道馬車は走る
がたんごとんがたんごとん
走って走る走って走る
智恵の山よりも高く昇り
科学の霊よりも軽くすばやく
黄色とオレンジ色の空を飛んでいく
走る走って走る走って
走って走って走って走って
鉄道馬車は走って
心は夢を走って
舞踏会の華が風に咲き乱れ
紳士の集いがうずまくり
貴族の楽しいワルツすばやく
華麗で珍奇な装飾とびまわり
豪華な果物走りとびちりまわり
馬車走って馬車走って
がたごとがたごと

心走る心走る

ごとごとごとごと

走る走る走る走るしるしるしるしるるるるる

人生桜目睫にあって

夢想の中に住む

舞踏会の桜は華麗な造花

地中に沈み浮き

夢の花びらは回り飛んでいく

二 - 2

青年の桜

それは嫌悪とロマンの混合魔の住む

禁じられた楽園

夢広がる独房

左手に頭

右手に足

左足は退き

右足は飛びまわる

分裂分裂

二律背反

あれかこれか

それか

分裂分裂分裂

色のエピュキリアン

匂いに遊び歌い

形のスイズム

数式の独房を記す

そんな両眼がくつつき

宇宙の気まぐれな花火

中世のエロ図書館

繁華街に静寂と

桜と杉の庇護に

過去を追いやり歴史を愛撫する

書籍の服にめしべ記章

ユークリッド幾何学第一公準の眼鏡は

女体の青いサングラス

机の蜜酒

ナルシスの井戸

水面にアルファベットが戯れる

説教のセレナード

1 を縮め **A** を切り掘り

目を増やし色を作り広げ

点と無限の衝突

ガチャン頭を打った
パクッ頭がひび割れた

精神膨張分裂分裂膨張症

エヘラムス

シゲネマネ

ちょうえつろんてき

めぐせじゃばくせ

カチャクチャド

メゴグサガシグ

エフリコグ

○+○→

かくれんぼぼム

見られてられて

られますまする

ああ！桜に恥ずかしい

わたしのわたしはわたしでないわたし

構造言語分子生物学相対性マルクス精神分析実証

的ネオトミズム文化人類学派実存現象主義

なわでないわのわ

分裂膨張の輪

生と死の境をふちどり

死鳥ともつれ合い飛びまわり

黙して造花と語り輪を結ぶ
人の森に渦巻きにちぢこまり
夢の空に龍巻に大きくなり
心の飛び沈んださまよい
分裂膨張は持続
求心に凝固遠心に加速し
さすらいの石像

石像なまま
深い恥と不安の楯を持って
殺されることなき戦場に踏み入る
防衛ならずただ影を育くみ
戦士の自己から次第に遠くへとちぢこまり
常に桜のロマンを偲びながら
嫌悪が首を絞めつけ
内からひび割れていく

二 - 3

桜
死の満開
大衆の満開
余興の

茶番の

壮大と美の光のもと

檻の動物

よりも動物な影

盗みたこ耳が

殴り微笑みを

汚す瞳へ

倫をはずれた

無数の触手を持った

大衆アメーバー

屑を宝と漁り

心臓を捨て

知らず自分をも食いちぎるを

肥り過ぎ桜を落とす

あの桜は散り

この桜も散る

捨てて来たはず

の素顔に

余興仮面

ピエロを追いやり

心を摘出した

肉塊をもて遊ぶ

子どもを飲み込み
白髪を染め
踊り若返らせ
人生余興
理を失い
流れは止まり
花びらが宙に舞う
そちらにもあちらへも
花びらは宙に舞う

裸でもどりとまらず
自然数で装飾し
構造を分解させる
盲目な茶番のヒーロー
救うべき光の姫を
忘れて握るは
黒い店舗
貧困の大蛇を
隠し切り刻み
海綿の脳は
糞尿を巻き散らす
社を驚掴む
毒舌の茶番劇
生活体の住む所なく

内にも外にも

桜は消え

桜の死

大衆が空間をおおって

悪風が暴力ふるう

空間の同一化

アメーバーの屍のみ

体幹を余興色で染め

発狂寸前に

揺さぶりにくすぐる

成長は錯乱し

時間の停止

浮遊の世界

茶番が物体を支配し

心は自由を奪われ

人間の泥濘化

桜は人間に住む

のをやめた

人間の死

時空間の

発狂

時・空・間

分裂

もはや人間は

なったいなく

すでには認識

はぐかされ茶番に

嘲笑され余興に

ついに殺された大衆に

存在は

相互作用とともに

散らされ行動に

と秩序ともに

投げられ意識に

と法則ともに

ついに消された社会に

存在と認識は

無の現象

言葉の博物館的記念物

いなくなってから人間が

たちどれだけ

広がったのかどれだけ

時空間もない

何も分からない今は

沈黙

ずっと桜はいつってしまった

52.5

林檎の宇宙

林檎は宇宙の像の通りに誕生した

大地より出で

快美な香気に生命を吹き込み

年

都市の東に園を設けた

眠りの夜

雄蕊は旋風に右へと旅し

園に左へと廻りもどった時

雌蕊であった

母胎の闇

一瞬にして受胎

自然は林檎となった

宇宙の緑児

五弁の^{うんせい}蘊星

水の中に分子生物のように色づく花

幼児が受ける光の木

林檎人間の群れは風を想い

プロメテウスの行うまま大地は火となり

無でもあるそれらから

アメノミナカヌシノカミの宇宙を識る

蘊星は惑星
惑星は遺伝分子
発生の循環
延長の惑星は
内観の中心宇宙へと消滅し
還元されていく
宇宙の中心は
原始民族の花の星
花の中の花は大地たる母
タイタンの種に圍繞され
水の昇天
光の降臨
ヘルメスの風渦巻き
自ら火の誕生
花びらの生成
花びらの変化する形が
自らを感受し
自らの表象を了解する
生と死の加入式儀礼
象徴を分析し
知識を認識し
大宇宙の真理となった
知恵が深く大宇宙そのものになった

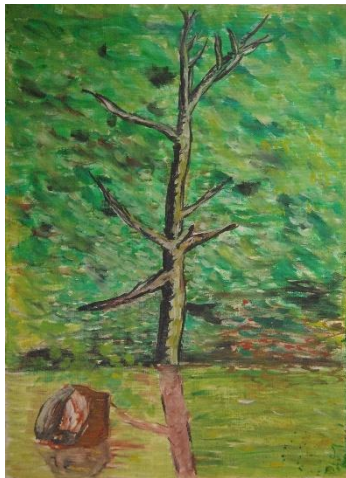
が自らを説明しようとした時
分裂

水と光に分裂
風おこり
酪酸とアミノ酸の解体
遺伝暗号は飛ぶ
無目的的に風は渦巻き
暗号が対応する
宇宙を無数の林檎の花びらが漂い浮く
花の浮き描く暗号が
人種の花弁
寺院の木
家の群れ
を貫き
自由に中心化し宇宙そのものとなる

一枚の花びら
内観の微視的な
存在と
暗号による発生論的
認識と
の関係の関係の構造へと
揺れ動く

一枚の花びら
花蘊を内に秘め
宇宙の流れに流れ浮く

52.6



Rの絵 F4

五つの樹の詩

ライラックの日常

五月雨が日常を流れる
石垣を曇らせ
玄関先の橋を打ち
庭に灰色が滲み
空との敷居を取り除く
水墨を漂わせ
かすかにリラの花
うつろな眼で
濡れ糸を感じ
明日の五月雨にも涙する
見えぬ足もとの下水の
どよめきに混じながら
かわりばえのない淡紫色顔
開かぬ口のまわりを
雨虫が動く
雨鳥が鳴く
リラが日常に流される
うつろに白紙のまま
白紙の書き込みに蒼白なまま
リラの日常が流される

生活がリラを忘れる
家庭が花びらを引きちぎり
仕事が葉を蝕む
リラは一つで全体なのに
静かなのに外から
生命の水を呑み込み
卵形の鼓動を内破し
四諦を了解した心を石化する
銅像の目があざ笑う
形を目そのものにした
にせと見られた自分を
幻覚として
日常が急ぎ足で駆け
幻覚は網目のように浮いていく
しかも一つであることを止めず
フォークは顔を洗い
お金が心臓をなぐり
自動車がアルコールで枕を作る
リラは何もしないのに
生活の名札をつけられ
忘却へと引きづられる
リラの生活が忘れられる

リラの五月雨
にせリラが頻出する
前も後も
隣が自分で自分が隣
表札は皆＜ことばの鑑賞＞
番犬のように
独創の盗人が
自分の盗人を説明している
根も茎も花も異口同音に
リラは静かに
無と時空の広がりを見つめているのに
ヨーロッパから風が吹き
ここで生まれた看板の世界
いわゆる愛ある人情
勇気ある体とやさしい美しさ
リラはとっくにしぼんでしまった
腕の土方
頭の教官
世間の医者
死んだ後に虚無感が残っているだけだった
上半身の空間を
にせリラの臭いが一帯をおおいつくす
日常の輪が首を絞め
リラはとっくになくなっていた

52.6.15

桐の理想

世界に屹立する象徴
大地と理想を結ぶ
生命の男根
愛智の泉が流出する
三浅裂の波となり
愛智者 説法者 説教者
大地を決定し
自由を操作する
三浅裂の雲の上
粘性の絨毛状の中
愛智が両側に
法と教えを伴とし
淡紫色の光を放射し
五蘊の風を吹きつける
軽軟な秩序のもとに
女琴の調べにあふれ
華麗な染料の飾り物が占め
愛智の黄金箱が無数に
統一と秩序の支配者
自然と宇宙の理想者

いつからか今はもはや
地上は曲がっている
物体は角をすり減らされ
静物は前かがみに歩き
腕は楕円を描き空をつかむ
愛人は家を迂回していき
職場は曲がり者だけを生産する
行政は酒と訴えに
ただ腹を曲げてばかり
人間は支配者の支え棒を
見かけの自由のため
観念の炎と燃えつくした
法は真空となり
人間のいない行政が
自然をも殺して
ハンマーの法をただぶらさげる
教えは神話化し
心のなくなった教育が
行政の追従者として
ハリガネの教えをただ突き刺す
大地と理想は
象徴に結ばれているのに
地上はひとりで
地下へと曲がり下って行った

宇宙の中心は秩序であり
秩序は円であり
円がまっすぐであることを
地上は知らなかった
ヌクレチオド螺旋して突然変異
胃腸はゆがんだ資本にだるみ
脳髄は蛇のように行動する
自然の光を曲げて人口の光を

風を反省せず私欲に曲げて用いる
秩序は孤立し
統一は夢の奥
理想者は怒り
ついに自ら滅亡の輪に
姿を変え 象徴
原爆のきのこ雲

忽然男根朽壤天界瓦解
下降逆行徘徊曲化激化

個体発生が右折して後ろに進み広がり
歴史は本筋をそれて回り^{まわ}る

堅固な存在を

まるい虚無感が破り裂き
まっすぐな認識を
屈折した情報が突き破る

52.6.18



Rの絵

つつじの平凡

あのこのわが家の一坪庭に
一つの細毛言語が無数に分岐
平凡が日常造語に拡散
平和が組織用言語を増大
生きようとする人間はすでに
巨大なつつじのまゆに窒息した

まゆ白鳥のトーテミズム化
首長はシャーマンを兼ね
死人を通過儀礼で文化化する
腹わたを毎日ひばの木槍で突き刺して
氏族達は皆
白い血を流す 目と手から
ウラン精神構造が分裂の危機に満たされながら
氏族が最も凡族であるのを付け込み
胞族の長老にはへつらいながら
それでも
あのこのわが世帯は静か
白い氏族は静か
ツツジのシンボル崇めて

つつじが飛んで

巨大な桜と化す

ンホニ族の唯一最高神

秘教の暗誦程度により

出自規定する

見えぬカースト制への加入規定

任務遂行機能

族長おかかえ狩猟班長が

小規模採集企業を強姦し

威信の裏に多妻の内花びら

統制的機能

長老議会が法の神のもとに

私欲を公共化し公共を白美化

儀礼で殺し生への移行はさせずに

表出的機能

治療シャーマンが

臭いを摘出し石を埋め

知識と創造を固定病にする

白い大空に一片の雲

機能にあやつられて浮く

半族長の指一本の気まぐれに

きのこ雲へと消えゆく運命を

社会科学で武装したところで

眠りへの原初的不安は消え去らない

内婚に規定され

観念への外婚は違法行為

結婚は未来はいらない

宗教へと再び戻る肉体の不安

数式と操作の文明への心の不安

恐らくは肉と心が溶けることへの精神の不安

人間はすでに哲学を捨ててしまった

部族を習慣が白くし

人類族を御用科学が習慣で光にし

宇宙は白い光線だけになる

それは

一片の花びらに戻る

つつじが白いのは

光のように広がるが

明日へは進まないため

横へ生きて広がるのは

見なれたものに心を安め

上から押さえる手を逃れるため

だが逃れればそれだけ

押さえる手をますます強くする

明日へと進まないのは
自分是不わらないのに
急いでまわりが変わり
孤独のるつぽより深まるため
つつじが白いのは
何もできぬありふれた
あやつられた悲しみに
涙さえ流せずにいるために

つつじはいつまでも白いまま

52.6.23

さつきの文明

つつじからの突然変異
捨て親は文明か
世界を紅葉化する
屋根を夕焼けを天空を
瞳は痛む

サツキ帝王
白の原始民族を食いばみ
淡いピンク色からどす黒い紅色の
情緒・素朴殺しの血で満たす
女陰を芸術を宇宙神秘を
目は痛む

化粧 着飾り 装飾^{そうほう}
白地は頭の悪さを描かれ
ショーウィンドー 看板 ネオン
闇は退屈なやつを沈めさせられる
変化 拡張 蠢動
ペルソナは奇抜で面白い面となる

う～んい～んお～う～んえ～ん～う

や～んお～んよ～あ～んゆあ～ん～ゆ

はしるははしるしはなしはしるしる

真空想像 幻影写真像 皆無意味存在

大きな美しい少女の母のドレスの紅色

音韻のうめく仮面

誘惑が大地に鼓動し天の波にのる

象徴への絶対へと天才ぶく

形態は分裂病者の解剖死体

欲望が銀河系の水玉破片を散りばめ

宇宙のはてまで踊り自由ぶく

意味は相対性に消された無

独創が心をつき破り輪を結ぶ

宇宙の外まで広げささげ英雄ぶる

世界の夜空を花火がおおい

百花繚乱

悪の根から枝分かれに生み

心は文明の大砂漠に蒸発

脳はマンツルの茎に埋まれて

マグマの血に焼かれていく

世界から一は消え

言葉でとらえられぬ化け物だけ
コルセットは打ちくだかれ
塵が目をつさぎ
あやつり人形は狂舞
世界の糸をこんぐらかす
土は蒸発して漂い
水は燃え広がり
火は溶け流れ
風は糸とともに吹き飛ばされた

根の手の警官は構造
見れぬためにつけられた あだ名
からまりで首を絞めつけ
トカゲを二匹ずつに増やしていく
とも食いでふくれあがり
肛門から無数の花びらをまき散らす

もはや何もかもおしまい
構造の理性的実存は
墓の底から地上へ新たに甦ることはないか
道はただ一つ
サツキがツツジの奥の素朴を
愛智の汁で濡れた瞳に
真白い花を開くとき

文明の帝国軍旗の赤よりも
原始ユートピアの白衣
活字と映像のカラーより
農夫の口唇に生む白い息
宇宙船が盗む宝石よりも
幼児のあどけない天の川を

雨あがりの朝
胎児のままに花ひらくとき
糸は光のように張り
退屈は無意味を生み
一はすべての母胎
真白井い花びらが
宇宙の心に流れいく
ハーモニーの風にのり

52.6.27

バラの孤高

庭園の孤立した空間
夕餉の匂いをとだえさせ
角状のうず巻から
サタンの香りをわき出す
いばらの光る先に
皇帝ネロの手兵で武装し
下界の花々を踏みつけ立つ
鋭い悪知恵を秘め
背後の木々をあやつる

世界制覇に遠征
花々は毒ガスを巻き散らし
木々は魂をなぐりつけ
すべての道にいばらを設けて
ついに世界の胸に血まみれの
一輪の旗

もはやバラは至高の存在
他のすべては地を腹ばいに
小指の微動を許されるのみ
いばらの網に区切られた中

雨に濡れる小石となり動かずに

魂の死臭は

一日足らずで世界を一周

個体はいばらづけの標本のまま

口は日常の反復

土砂をかみくだいては吐く

頭は宇宙船をも操作する

ブロックの門を破壊

コンクリートの上を金属製靴で歩く

街灯を倒す 転倒

粉碎 市電を曲げ はがね反動

瓦解 高層ビルへ飛ぶ

激突 爆発 破片は放射状に拡散

中心からバラの花が膨張

バラ星誕生 宇宙の支配者

頭は神にも命令する

バラのために聖水を盗む

白糸の滝はしぶきを上げ上昇

天の川が脈打ち流れる

生命の水 バラの王子の誕生

宇宙海

バラ星が燃えるバラの海

なまずのような口を
電波がわし目で監視
かみくだけ のみほせ と
電話がむち打ち命令する
口だけを残し
いばらづけの体は
バラ星に串焼きにされ
バラ海に溺れさせられ
激痛がいくども反復する

バラの永劫の拡散膨張
を戻すのは古代の賢人たち
の再現
庭へと追い込み
野へ沈黙する一本のバラへと
ただ口もとで反省する
愛智者ではない認識の愛智者か

いつしか
沈黙のまなざしが生命を歌い
母なる大地が愛を育み
さわやかな水が音楽に流れ知を植え
孤高は生誕地の花壇に

地上のつながりは新たに
すべてが同胞へと
いつしか

追憶の夢
愛撫し合う
花びら
もみじ手
ばらは雨に泣き風に安らぎ
素朴な時のリズムを合わし合う
空にあこがれ
海に恐れなつかしみ
場の広がりと同じにし合う
花

顔

自然の光

花は恥ずかしそうに
水に映る

52.6.29

3つの詩

落葉

午前十時

世の中がさわやかに活動する

雨あがりのあとのように

自動車の警笛も可愛く

人々は

秋の日を背に感じながら

散歩のように街路を歩く

紅葉もいまは水彩のように

ねばっこい人情は遠くへ

土曜日の午前十時

人々の最も神聖な

流れの一瞬止む空間

校舎に落葉は戯れ

庁舎は愛のあとのように

秋風の快い冷たさが

素朴へ再び目ざめさせ

街の心にしみわたる

喫茶店は瞼のようにシャッターを開き

クリーニング屋はまわりを清める
美容院は
風が踏み土を通り過ぎる程に
ドアや窓を開け放し
美容師は椅子に座り
来客を静かに待っている
書店の書籍ははたきをかけられ
くだもの屋の果物は水で洗われる
食道は掃除されのれんをかける
そんな店を向かいに大学は
枯葉を散らし文化祭
文化祭とは何と静かな祭なのか

かいま見せた午前十時の素朴
もはや午後の激情と夜の退廃に
心が動かされてしまった
素朴は非個性的
秋風は人々から隔離された
秋風に吹かれたまま
秋風が何もしないように
ただ路上を散歩する
枯葉が散るように
私から文化が落ちる

52.11.5

季節のはずれ目

初雪もまちか
庭の秋草も色あせる
遠い大工の音もあわただしく
電線は冬へと揺れる
ビルの屋上に渦巻きは小さく
青空は南に去って行った

生命の離反
形相だらけの舗道
凍結湖のように
上空の白さを写す
一人の男の子が
どこへ行くのか走り去っていった

無機物の凝固
鉄のかたまりであふれた路上
軍手に引かれ
吐息の白に包まれたまま
首が動かないようにして
車輪はすべり去った

原子への死

還元不可能で埋もれた地平
野は万物の結び手を切断し
山はまなざしを矢で刺す
象徴の鳥でさえ弾丸のように
爆発し破片で散り去った

世界生活の残滓

無に等しく
人類の営みは
何のためだったのか
自然の命令に服され
限りなきシシュポスの反復は
心の炎を大きくするだけか
宇宙の音のように
空虚へ響く

一つの生けるものが去り

残滓の下
いまのここから
冬へ移り変わるように
何が生まれようとしているのか
と再び新たに問う時
少しだけ心は潤い

長くなる夢に
白い天子の降りる姿を想う
人類がわずかに安らげる
季節の裂け目
いまのここだけにある

永遠の長き夢も
束の間
いまのここ
という現実の根は知っている
来たるべき営み
食いつかれたプロメテウスの反復を
もう一つの自然は
衣装だけ変えたあの命令者
反復の前に進化のなんと矮小なことか
心は窒息へ
残滓の量だけが増えていく
いまのここそのものは
重みに耐え忍び続けても
いつかつぶされてしまうのか
いつになったら残滓を焼き払うのか
誰かが
肩の荷に心をヤニだらけにしていく

ああ 夢よ
そこに溶けていたい
いまのkおこだけを持って
季節のはずれ目よ

夕ばりが降りてくる
大工の音はとぎれ
夕ばりの影 闇が
秋草や電線をすでに消し
ビルは黒い死骸
まだれのような雨が降る

52.11.10

硝子の間

どこから来るのか
戸を閉め小路に出ると
白鳩の柔らかい羽のように初雪が
ずっと部屋の中にいた頬に冷たく
目がさめ皮膚が生き返る
小路に人通りなく
正午の静けさが染み通る
木造の家にふさわしく
雪はふわふわと
白い天から降りてくる
暗い部屋の残像から
開くこちよい目の痛さ
路上は濡れる
泣きじゃくったあのように
思わず立ち止ませるこの胸の
ときめかない波のようなものは
いったいどこから来るのか

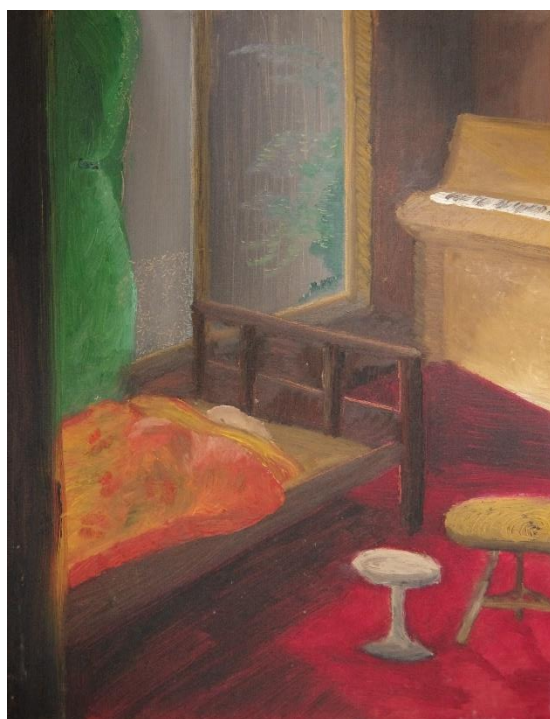
何なのか
遅い夕食を済まして
再び戸を閉め

その音を耳に残したまま小路に出る
小さな電燈にとろどころ穴を開けられた闇に
ただ一つだけの靴音が静かに響く
病気がかりのように
今は雪が降っていない
窓のあかりに下から照らされて
桜の花よりもはかない初雪を
背にして小枝の模様
この世のものではないような
いくつもの形容詞を一緒にさせた
小枝は少しも動かず
この足も少しも動けない
思わず見つめずにはいられないこの胸の
濡れるのではない水が染みこむようなものは
いったい何なのか

一枚ふえた布団の中にじっとしている
目を閉じることもしられずただ闇を見つめ
大路のマンホールのふたをタクシーが
ときどき踏んでいく音が聞こえる
柩をノックするように
枕元に死がひざまずいているように
闇に重みを感じながら
でも胸には重みがなく

何もない世界にいられないこの胸
在りながら何もないことを
どういうことか
と問うこともなく

52.11.15



自室 F8

8つの歌

朝の前、帰った朝

窓硝子が曇る

洗濯紐が揺れる

薄い春を偲ばせるような樹林らは静かに

その間に遠くでも近くでもなく横向いた二階建ての家屋

窓は点描画のように映る

水色の壁

白い空

硝子の滴が一つ落ち始める

隣室の幼児がすすり泣く

教会の塔のような樹林の先端が揺れる

広いカーテンの窓からショパンのピアノが流れ

雲はかすかに動いた

メンデルスゾーンのスコットランドが低くおおう

窓は線描画のように映る

海が雪を岩に落とすように

雨音が窓の上に時折

上の方から窓の靄^{もぐ}は晴れる

輝きが雲間から下りてくるにつれ
ここから新たな朝が始まるのか
今に建設が到り来るのか
ヴェールを剥ぐ生命科学のように
だがここは永遠の地平線
地球は生命なまま
構造はなく古代インドの水が流れているばかり
たちまち日は隠れ
風と雨が
数えはならない
硝子の表裏はただ濡れている
外の自然も薄れ消えて

54(1979).11.7

雪の弁証法

昨日は初雪だった
めずらしくも午前中降り続いた
が
去年の冬のように立ち去った

朝 目がさめると
隣の家屋に囲まれた小さな畑は雪におおわれていた
新聞をドアの差し出し口から取り出した瞬間
出勤した妻の足跡が残った

新鮮な雪の中
樹木を移りバスに走る
川を改めて見ながら橋を渡り歩く
病院は清潔を増す

いつもより沸騰させたのに
洗顔に何か冷たさを感じる

※

環境なのか タブラ・ラサなのか

エピステーメーは雪になった

枝のつけ根に

大腦のような綿雪

天からの一つ一つの知が

だが

木は奢らない

自らの知を語らない

知の悪——捨象・記号化——に再び落ちまいと

あるがまま

アジア・アフリカは揺れている

いや

まだ揺らされている

歴史という時間と左右という空間に

いまや自らの思想に帰れず

抽象でも論理でもない思想へ翔べ

氷河の正法時代に

アジア・アフリカ

そのままに

午後から

マルティヌーがコンチェルト・グロッソし始めたように

雪が

闊葉^{かつよう}の、枝のまわりに舞う

窓には綿のように屋根には塩のように

螺旋

DNA のように

雪原のような第一の天に

第二の天の日には何億年もの光を俗の一瞬に薄められる

池に揺れた街灯のように

森羅万象に雪よ降れ

眼鏡も窓硝子もないただ雪よ降れ

おおい象^{かたど}るのでもない溶かすのだ

自ら死に至らしめるために

54.11.14

初雪の街

きのう初雪が降っては消えた
朝めざめると雪が積もっていた
街を歩くのはすがすがしく白い春のようだ
舗道も自動車も疎くない
だが^{ほの}灰かにアミノ酸配列が多調へずれた

昼になって、空一面をおおっていた雲が薄れ
太陽が白い程にぼんやりと現れた
息吹に樹木や屋根が一瞬開眼した
校庭に学童たちがいっせいに飛び出す
その区画の並木を通る時
雪が少し溶け靴が濡れる感触のハルモニア

夕暮れになっても道以外では根雪のように残っていた
複雑な十字路のまん中にも残っていた
まるでそれは昔から雪のものであったかのように
門燈や街灯に点滅が始まる頃
どこから来るのだろう この移調は
やがて自動車の動く光に雪は忘れられていく
人々は家にこもり、この一日を初雪を忘れていく

人々は何を記憶に留めて生きているのだろう
仕事での出来事か楽しかったことか初体験か
初雪はそんなものではないのだろう
＜偲ぶ暇があったなら何かした方が良く＞
それが自然で建設的なこと

いつまでも取り残されたまま
闇の中でただ初雪が降り続けている

54.11.14

思想の壁

書棚に整然と並んでいる書籍
多くがただ一度繙かれたまま
埃が隠れるように重なっていく
この世に無益なものをより静めあうように

白い椅子がいつ頃からそのままにある
茶黒い思想書が並んだ傍らに
斜めに置かれた椅子に斜めな古代の一冊
固い箱が椅子の一部になったかのように

書棚の上の壁は煤ばんでいる
短い一行の落書きに傍線
すべての白い文字が無意義であるように
書籍は皆壁となりまっすぐな落書きを残しただけ

^{あざくら}校倉を模した戸のついたレコード入れ
中世の音楽は三重にも包装され
文字と音は生き別れ 花びんは墓標
様態の異なった壁だらけの部屋は壁のみを生み

54.11.19

分校の秋

十三湖の湖面には何らヴァリエーションがなかった

生徒十三人の分校は雨に濡れている

茶黒い単色となった背後の丘陵

その延長のような校舎の屋根

もう何年も使われていないのだろう

赤さびた玄関のベル

昔日の生徒たちのにぎやかさを秘めながら

雨は降り続ける

北津軽の日曜日

魚の骨を思わせるような木々に囲まれ

くぼんだ校庭

侵蝕がなおさらくぼみをつくり

雨も流れる音も聞こえない

今年も運動会は行われなかった

未だ運動クラブは再開できない

やがて皆で除雪に汗を流すのだろう

知恵と行動は結ばれ育っている

54.11.20

内は外

退社で人々が賑^{にぎ}わうころ
通りの奥の家に光が燈^{とも}る
昼には気づかれにくい
そこにも世界があったのだ

アルミサッシの窓が輝いても
無住のように静かだ
だが どこか違う
幼少^{こうしう}の格子縞^{しほ}の窓とは

火神アグニのような神々をかつては祭ったのだ
格子縞にはその伝承が語られていた
閉じた世界で太陽神スーリアなどを回想
それが生きた証だった

閉じたはずの世界で
すぐに向こうの世界を見る
逆らって昼を創り出すのだ
どれが自分なのか気づかないままに

アルミサッシの疎遠

夕餉の香りを染み込ませることなく
雪よりも冷たい光
仄かな影はいつこうに映さず
霜柱はそこから始まるのだろう

54.11.22



Rの絵 F4

黄昏

雲ににじむ西日
鉛筆を握った手の
影が落書きに浮く
かげろうのように

枯れ葉のかき集めた跡
土を嗅ぐ隠居の
雪囲いが原画をふさぐ
金魚鉢のような庭は

まるめろ色の街
城下な屋根並みの
向こうが山をかすめる
病んだ空気が揺れ

過ぎた日を
割烹着で包む
海軟風から

炊事場の下水が響く
生をすがめる
老いゆく季節に

54.11.27

もろい歩み

初雪から三度目の雪だった
雪は重みを増している
街の午後は鉛のようだ

向こうの信号機に
鞆を背負った少年が立ち止まっていた
信号が変わっても渡らなかった
信号機を見上げているのだ
手に針金の曲げ伸ばしを繰り返し

振り向くと信号はまた変わっていた
少年は見上げたままだった
少年と二重に直角に
私はどこへ行こうというのか
軸の一つの私は

次の信号機に
再び彼がいるのではなかろうか
歓喜でも驚異でもないあの表情
あの声色

小屋の二階に繋がれたあの女性や
焼けて顔のないあの炉端の婦人
施設の涎を流す少年や破衣行為の青年
ずっと頭にこびりつくも何もできず

残されたのはただ一つの軸
もろい鉛のように街に包み隠され
一本の細い支柱を封じる世界で
いったい何処へ行こうというのか

54.12.11

4つの詩片

4つの断片

消存

生とぎれ

霜夜の風に

過去が泣き

窓越しの月

世界が沈む

私の私が私

深層をつかむのは他人ではない

表層がじつは知っている

深層にさらに深層があることも

そこから表層が

他人に隠れて時々宇宙へ散歩する

伝達

言語は切手ではない
手紙がどんなに正確であろうと
切手が世界に通用するものでであろうと
ただ使用済なら言語になる

< ? >

座禅せずして禅語るべからず
座禅しても語れず
禅の奥義は最初からしてあらず
すべては禅のごとし
すべては言語に縛られているから
言とはこれ無なり

言語は記号なり
記号はすべて言語なり
すべて記号なり
現象すなわちこれも言語なり
言語とは語りえざるもの
語りえざるものは沈黙す

事件とパロールは消滅
構造とラングは幻想

言語の唯一の機能は
すべての間を抹殺すること

科学が石で雲を説明するよりも
子どもには雲は石

55.12.14

反射

宇宙を知ろうと思うのは
宇宙にそうさせられているから

おまえが宇宙だと思うのは
宇宙がおまえでないほどに違う

数理が世界を説明するのは
大海に小石を投げたいから

すべての認識方法は結局は直感
月を月以外の記号で遊ぶにすぎない

直感とは認識できないこと
観ているとただ思っているにすぎない

宇宙は宇宙 おまえはおまえ
宇宙とおまえの間には何も生じない
それだからのみ宇宙とおまえは一つ

55.12.14

爆発

宇宙が空下痢すると
私は地球から飛ばされる
無空に漂う雫のような分子

欲求の限界値なのに
欲求がかなえられないとき
宇宙の爆発
それはと地球から連鎖する

私の私たちが
小宇宙を創るため
宇宙がトイレに行く前に
腹痛のあまり空下痢する

55.11.20

しょうがなく

思っているとき
知っていると思っていたものが
つかんで投げようとする
手は水の中だった

濡れた手でもよいと
差し出してみると
みるまに乾き始める
ただの手であった

容器でくみ出してみると
水なのか容器なのか
両方なのか
わからなくなって
容器も変色していく

わかっているのは
水があることだけ
どうしようもなく
思いつき水をたたく

55.10.24

24 の詩

街

休日の散歩
繁華な十字路を何度も立ち止まる
人々は笑みをうまべている
何に対して何処からか
六日間の鉛顔から解放されて
ただそれだけでか
だが それでも 粘土のような顔
何処を見ているのか何を見ているのか
公害計器は頭上で勝手にめまぐるしく変わる
仕事と家庭の反対側を見つめているのか
とにかく 向こうに立っている人達は知らない人達だ
それだけで十分安心なのだ 幸福なのだ
信号が変わる 一斉に渡り始める
舞台の中央を威信を持って
前後左右行き交う人々を家畜のようにあしらいながら
だが これも 仕事と家庭に続く第三の偽り
その足で、信号柱にも止まらずデパート中を歩き回る
その足はレストランの席に着きながらも絨毯を何度も足踏みする
ここでも道路に、信号に建物に分離され

心も幾つもの部屋にひび割れる
ここが震央だったのだ
社長や家長は余波に過ぎなかった
街はこれまでの残滓の累積物だったのだ

不消化物を背にし車窓からの風景
心からの破片 勾配した新興団地だ
自己がないゆえに自己主張し三階四階
暖かき荒地は運動公園に
背後の海でさえ ここではプラスチックのようだ
街も郊外もそして自然さえも
すべてがそれぞれのユニホームに包まれている
＜われわれ＞という＜かれら＞は何のための
地震や爆発を工作してきたのか
世界の誕生が爆発にあったとすれば
負のエントロピー 自然治癒過程
そこに現在の姿があるべきだったのではないか
粉々になった魂を その核爆弾を
バスは更に寒村へと走る

55.9.29

すべてを越えて

蕪島から風の夜景を抱く
降り階段は海へと入り
向こうの波止場から漁へと船が
街灯を海の向かいネオンと揺らす
街明かりは小雨にくすぶり
神社の森は薄雲にたなびく

戻れ
愛は固なり
印象は黒く落ちる

神主が子どもに合掌するその傍らを
老婆がトレーニング姿で走っていく
麓の禅宗系の屋根に自家用車が
流行音楽を絶叫させ飛ば
武家屋敷は雑踏の間
道路は蛇のように動き回る

戻れ
破壊は溶け
過表現は割れ
異表現は流れ

飲食街の朝ビルは白く
航空写真の路上の白線
その上に車両一両落ちる音
すぐ街灯が落ち割れる
襲って来た津波が上空で
太目の網となって止まる

戻れ
形はくずれ
つくり画はまがる

戻れ、いや越えよ
愛智へ 心の愛智へ
越え戻れ
心の愛智 小波の

55.10.10

小石

廊下の外で
落ちた柿の葉が
見えない風に揺れた

ドアをあけると
がらんとした部屋
さきほどから三人の話が
急にとだえた
そのそばを通り
隅の席につく

ただノートを開き
白いページを
柿の葉が転がる音
何度くり返すのだろう
落葉の季節

55.10.24

足洗い

浴室の曇りガラス
電灯をより白くする
想う姿をも雲のように

そのドアをあけると下^{したぐるま}車の音
湯気がゆっくり浮かんでいる
閉めた音がガラスを割りそう
もう二度とあくことがないかのよう

タイルの独房
かけ湯と桶の音
を残してつかる
一本の浮かんだ髪の毛
下半身はゆがんだプラスチックのよう
ぬる湯にいつまでも

気がついた時には
ドアを閉めていた
一瞬冷気が襲う
濡れをなくそうと何度も
必要がなくなっても何度も

蘇えようとバスタオルで
一日の涙をぬぐう

55.10.24



階上岳 F8

階上岳と私

豆腐のような
灰色の底からつきあげるように
しわだらけの階上岳
老荘の境は頭脳のようにだ
きわめて平凡な山だが
まわりがあまりにも凡俗なのだ
登ってしまえば
ただの見晴らし台か
ああ幻のようだった利尻富士

麓の平面の少ない牧場
家畜はいなく黄緑色が模型のようだ
あまりの小ささに子犬がふさわしい
清純な地球はこうであったのか
雨も似合わない
小羊でも放たれたら
平面ではほとんど身動きができず
傾斜が急でジャンプ台になるか
雨が降ったら
底の苔が透けて見える河川か
ああ外国のようだったサロベツ原野

平凡で小さな自然
それが宇宙でもある私だった
人の群れなす山と言語に
囲繞され影となり
食いちぎられ主語だけとなる
大人らしさと言葉に
打たれ小心はふるえ
犯されシラブルのみ残る
そんな飛来する風と暴雨
私は植物
根から水分を上昇させるのではない
涙を落とし

55.10.29

枯れ池

紅葉がところどころ現れた丘
叢雲^{むらくも}が燃えるように流れていく
暮れあいの末^す枯れたとうもろこし畑
朝露は初春のようだった

暮れなずむ茂み
でこぼこ道に影が^{たたず}佇む
開けた田地は暗褐色の海
恬^{てん}としたのは民家の屋根だった

夕食は一日の祝祭
明日^{あした}の寂寥に費やすための
食後の窓辺のくつろぎは
過去の残渣へと退化する

褥^{しとね}に背は冷たく
枕に後頭部^{かた}は硬い
数万回も繰り返す生の休止は
九十億もの到来する大地の末法…

55.11.5

長い夜に一瞬の昼

ネオンの遠くが闇になるとき
最終バスを待つ始発の人々
バス停を目睫に長い数分間は
早く忘却したい半日の縮図
青白い空車が到達しドアが開く
が上車する人が泣くためらいがちに
ドアは閉じ運転手もいないかのように
去っては目睫にバス停と道路のみ
人々はやせた仁王立ち
気づくと別なバスが止まっている
縦列でロボットのように上車し
満車はそこにいつまでも影を残す

外を眺めても闇に仮面が浮く
からだだけでは無い車の命令により
人々は前方から目をそらさない
まるで皆の家が常に前方にあるかのように
頭は玄関の音に食卓の椅子にパイプの煙に
肉体はバス停ですでに死に　ここでは火葬中
社員服も書類もパラパラと燃える
が誰も皆印鑑まで燃やすのを忘れてしまう

そして下車寸前に座席の奥から
運転手の社長の後頭部に気づき
背後から半日の怒りを打とうとするが
傍らを運賃の音を響かせて走り去っていく

出勤の時は短距離だったのが
闇の帰路は就寝のように長い
からだの車は鈍く地面にへばりつく
ミミズが這う原初に一瞬戻り
気づくと玄関の脱いだ靴が目に残る
戸を閉めただろうか挨拶をしたらどうか
この時自室に廊下があったことを思い知らされる
洋服タンスを開けると何本ものネクタイ
ネクタイを外す時納骨の終わりだった
朝に棒の影であったものたちが
今初めて人間という愛になる
一日はここから始まってかげろうのように終わる

55.11.6

海岸にて、凡学者から

自然の前に

心がふるえるとき

人の愛を知る

画家のように

指でキャンバスを造る

青い海 青い空

なんという清楚さ

音楽家のように

手でタクトを取る

流れる白い雲

なんというさわやかさ

詩人のように

黙って両腕をくむ

砂浜の重み 水平線のかなた

なんという...

地上に人間がいなかったなら

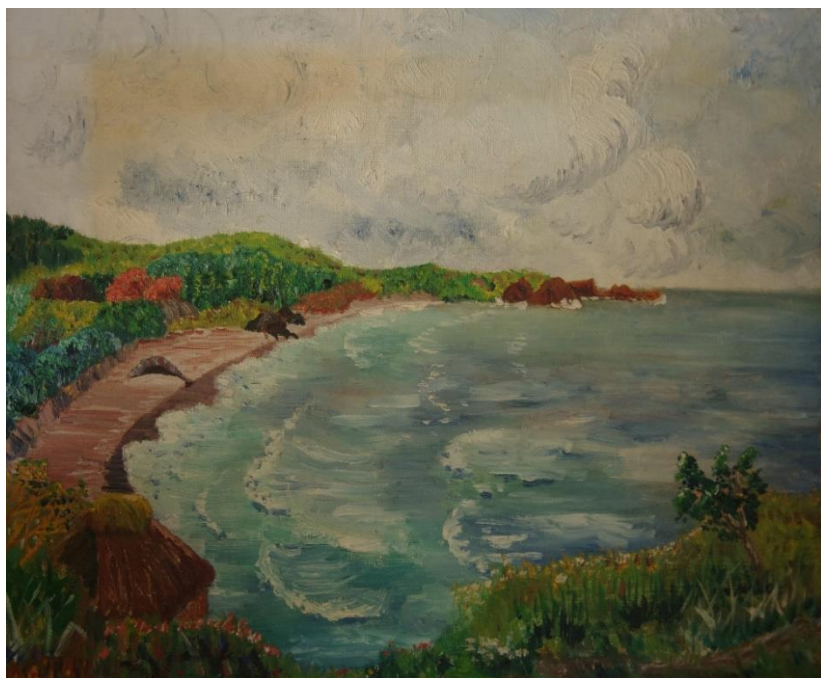
人間に自然がなかったなら

石は心にならなかつたろう

知の母胎

世界にしみ込んでどこまでも

55.11.9



海岸 F8

東風

雨の雫が窓硝子をしだいに潤うように
夜明けが茂みの紅葉を深めてきた
傾斜した耕地は渋く干涸^{ひから}びている
赤蜻蛉^{とんぼ}は影を潜めたままで
東風^{やませ}に秋は離陸しそうだ

小石が痛い小道に黄色い松葉が
風雨に彼方^{あつ}此方^{こち}の低みに群がっている
並木道の開けた向こうには街があるのだが
林の中を踏み 埋まる秋に黙別する
色褪せた幹には木漏れの光が届かず
落葉の裏の生命は始原へ降りていく

窓越しの一日は夕暮れの鐘で終わり
収穫が済んだ耕地から百姓のように
鳥は鳴きながら丘陵を超え飛び去る
夜が来るように季節^{たいうん}の顔運は色濃くなり
東風^{からえずき}は空嘔に震え暗み^{きし}を軋む

55.11.9

季節のすき間

高名な温泉駅を過ぎると
車窓から一瞬 海岸が開いた
この時 故郷の圏内に帰ったと
いつも心の中で方言が言う

故郷の霊峰が
明るい夕べに聳^{そび}え立つ
海は伸びやかな平野を想い
小さな岩々を白く打つ
小舟は古代に浮いている
夕日は田園を染めているだろう

そんな車窓の風景だったのが
秋もとつくに過ぎた今
荒々しく波は高く
夕闇の街灯が白い
霊峰は黒い雲塊に隠れ
舟は岩棚に乗り上げられたまま

隣席に婦人が腰を下ろした
婦人は向かいの人に気づき

「あれ、どこへ行ってきたの」

「はあっ」

二人とも両手をこすったり、肩に手をやったり

手の中には沈黙が続いた

やがて 車窓や膝元の沈黙が

閉じられた

娘は頬を赤らめていた

次の停車駅の放送が流れた時

「××さんはまだ未婚？」

「彼女、一回おろしてるの」

娘はもどりつつある頬をますます赤らめた

婦人は先に立ち上がってデッキに向かった

娘は停車してから

唇をかみ立ち上がった

娘の座席には晩秋が漂っていた

もうすぐ故郷だというのに

長いトンネルが続きそうだった

故郷

それは狭い地方だけだったのか

国も地球も宇宙も

皆故郷ではなかったか

婦人と娘にとっても

わずらいの明日を思うな
進歩のない宇宙こそ
われわれの母胎
方言は宇宙の一信号
晩秋は夜なのだ
もう禪宗のような冬も
車窓を叩き始めている

55.11.20

宇宙の冬

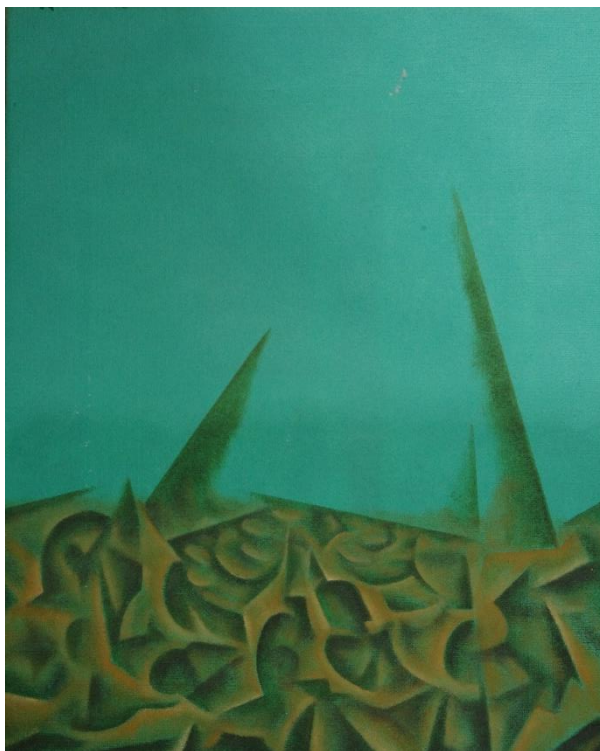
青いがプラスチックのような空
足下の舗道は金属のようにはね返し
靴の踵^{かかと}が硨^{こだま}する
テニスコートは薄い石灰岩に押され
網目の鉄柵がどこまでも続く
ひび割れたビルに
透明な風がいつまでも止まない

眼鏡越しに寒気がしみいる風景
凍った鋭い数理が
大脳皮質を堅固に縫い込み
禅の公安にハンマーで答える
廃車と高速道路の累乗は
季節をこわばらせ
空をオペのメスが切りきざむ

宇宙のゴミでしかない文明
レモンの汁のように
ブラウン運動をビリヤードの衝突にし
内外をしかめさせ柱をくずす
認識は霜がれ存在は霜崩れ

世界は雪に結晶する
きたるべき宇宙の冬

55.12.14



T氏の作品

光の奥

いつかどこかで
触れたような風景であっても
確かに初めての喜びが
大地の生命が
無言のまま呼応する

冬の海岸線
起伏の鎮^{しづ}んだ陸は
静かに海に入り
波は眠る
水平線のかなたは
ここだった

幹だらけの林の中
どこへ流れるを知らぬ浅瀬が
一列の木々の両脇を
いくつもの泉のように
木もれから薄い日が照る
世界の起点は
ここを映した白い空だった

海辺の木立の十字架は
宇宙からの言葉
私が死んでは生きた
いつでもどこでも
宇宙への言葉にできなかった
自然の心

56.2.2

幻雪

丘陵にある郊外喫茶の窓硝子に
珍しくも湿気のある雪が降る
暖炉、テーブル、椅子、そして
コーヒーの色までが古典的だ
だが一口飲む瞬間に時が回る

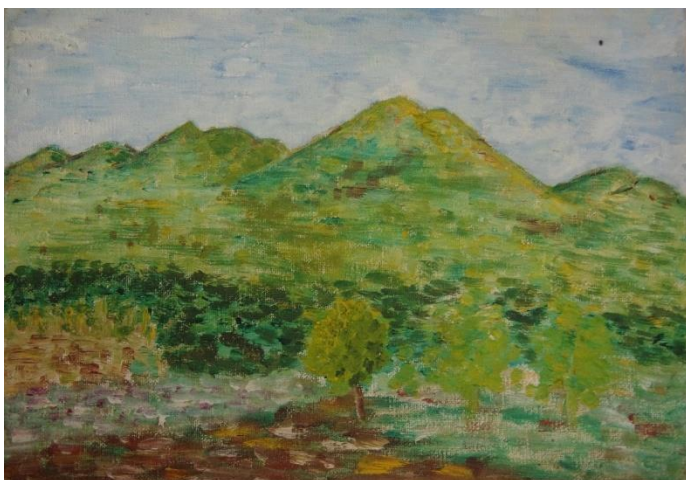
歯車、油、労婦、そして忙しい電話
警笛、レール、電子ランプの点滅、そして紛争
地球はずれながら自転不順する

窓の外に、重苦しい外套の私がやってくる
気づかぬ風が駐車屋根の端を揺らし
一台もなくただ足跡だけを残し
雪は私を貫き綿塊のようにまっすぐ降る
死界から死界へか あるいはそこにいないかのように
窓硝子もないかのように下向きに歩む

窓硝子は厚かった
コーヒーを飲み干すと本は開いたままだった
ボーイはレジの前に座ったままだった
本を閉じカバンに入れ清算する合理性

個人幻想は煙と流れそれを追う足先
これだけが一日の収けんだった
それを一つ過去へ投げ入れてやる降雪のような淋しさ
地球は自転しながら止まっているのだろう

56.2.11



R の山 F4

雑草

荒漠たる丘陵に一本のバイパス
大地を刻んだのは誰なのか
同胞がいつか破壊するのに
何のための雑草は踏み躪^{にじ}られた
傀儡となるのはいつの時代も
汗を流すものと雑草
生に根をはり生にしっかりと足を踏む
彼らこそ地球の主人ではないか

バイパスは架橋へと下り
権力を象徴する建造物の密集地へと続く
丘陵のバス停からの展望は
光が湾曲して黄土食に包む
いつから人々はその映像に美を載冠するようになったか
貨幣の記号と行動の言語を勝手に作動して
放射状に文化爆弾を拡散していく
支配者よ権力者よ、智を冒瀆する知者よ
微風に額を触れ、時雨に頬を濡らし
そして、雑草と地面に素足で飛ぶのを思い出せ

そういうおまえは

バスの来るのを待っている
現代の美と価値に染まりながら

雑草の中の一つの雑草が
黙している
小雨に濡れたのも忘れて
今はただ弱い春風に揺れている
空を眺めながら
バイパスの音は聞こえないのだろう
空の鳥を見つめながら
何も知らないから
黙している

56.5.30

闇の韻

濃い霧のあとの雨
どこまでも闇を深め
街灯も窓明かりも一色
季節を消した重い韻は
太初の夜に絡^{から}み合う

脂^{やに}だらけ空言^{そらごと}なの独居
夜から夜へ生を逸^そらし
一行^{くだ}りに注ぐ笠付電燈台
静寂^{しじま}をぬって韻は不意に
海が引くように無に風化する

残像の祈り重なる生
印象の連珠を渡る時
確かに架橋だと思っても
立っていたのは河のほとり
ふり向くと深い霧の雨
河はそして私はどこを
流れては海へと行くのか
すべての韻を吸う海へ

あの子は...

あの子はどうしているのだろう
たった一度だけ会った
あの子は

小さくやせた
あの子といっても
あの時二十いくつだった
あんなに白い女がいるだろうか

綿小屋を家屋に修理した粗末な老朽した家
数回発作に倒れ入院歴を持つ半身不随の老いた父
ぶ厚い眼鏡の視力の劣った家事に^{いそ}勤しむ老いた母
あの子は末っ子だった
兄妹たちは何処へ立ち去ったのか
数年来便りは皆無だった

あの子はどうしているのだろう
会っても話のできなかった
あの子は

アッチャとアーアーしか言葉を知らなかった

そんな口であっても
あの時あんなに食べるのが好きだった
あんなにスプーンどころか
指もほとんど使わない子がいるだろうか

粗末な老朽化した物置小屋の二階の
天井が低く狭い部屋
布や紙を嚙まされ

56.7

霧は流れず

行き交う車の少ない
喫茶店の窓は霧だった
十数個の椅子の広さに
若い女主人は黙る
すべてが静止している中で
一瞬音のない車のライトで
逆方向に窓が閃光していく

カップを置く音だけが
煙のように漂う時
奥の部屋から子どもが
しゃくり上げてやって来る
子どもは黙って母にとりつき
母も黙って抱きしめる
天上のライトも空の椅子も
とても掃除がなされている
哲学書を読む恥ずかしさと
去る後の恐ろしさに責められ
どれだけ経たのか
ついに立ち上がった

ドアを閉じた目の前は
濃い霧だった
肌と唇が震える
運命からの不平等は
人智ではどうしようもないのか
いまこそ偉大な哲学者よ

どこに姿を隠しているのか
科学の時代でも
社会、文化の時代でもない
人間のそれは
いつに来るのか
霧はあまりにも深過ぎる

56.7.10

津軽のソルヴェーグへ

秋に挿入し熱帯からの雲が一瞬に急昇する
高山植物の月山の面影は禅僧の筆を染めて
最上川の泥流は奥入瀬溪流を映すために清める
即身仏の化粧着のような秋へどの方向から挿入するのか

ここが津軽よりも秋なのか冬と接吻しない口唇だけの
深夜だというのにトーンクラスターにもならぬ工場音
産業は保守により進展しているが思想文芸もそうなのか
かもしれないが哲学がないそれが現代的なのだ

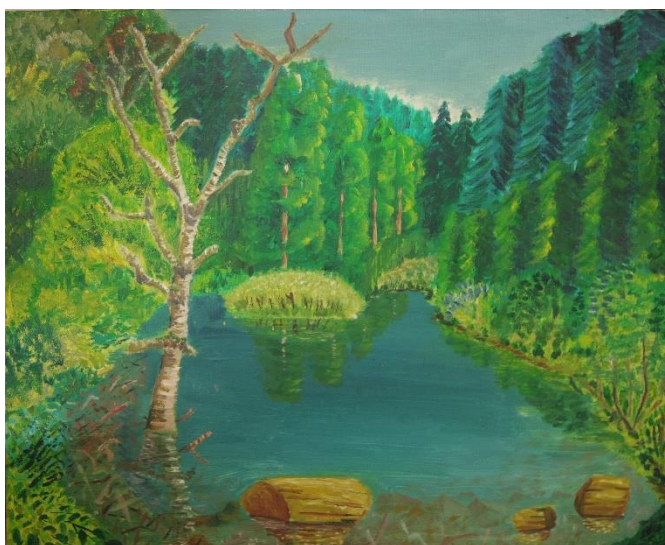
君は南部の大地から誕生したが
その防波堤に埋もれた砂と工場船に被われた波と私

帰りたい津軽へ君のもとへだが帰れない
私のソルヴェーグ君もほんとうは三度一緒の時
＜帰る＞と言ったのをそのパロールを口唇で塞いでしまった
無知の罪に遅れて悩む今深く濡れた花びらを

世相は秋に入った南部にこそ秋に入ったと
評価うわさするがほんとうの秋は君の中に
ロマン派の半世紀を生きた現代人はここにいるのだろうか

恋いし愛する愛^{いと}しさに愛と智が溶け合い
ほんとうの秋を二人の濡れた宇宙に輝き出すために

56.9.6



沼 F6

晩秋の二度目の雪に誘われて

バスを降りると港の高台であった
バイパスの舗道に薄っぺらな紛雪
宅地になるだろう荒地の枯れはてた茂み
闇に包まれた歩行者のためにでない街灯は
冷える頬よりなお寒い港のむこうの海のように
自ら照っているのではない首を垂れた姿勢は
今日という切れた一日の孤独に呼応するかのように
人影のない一晩を過ごさなければならない
孤独の奥の恐怖に耐えながら

夜は何のためにあるのか
死の再生という宇宙の儀式のためにか
なら明日は何のためにある
生の実現という偽装の底に向こう側の死を
連続という錯視の共同幻想のもとに見せるだけ
無数の昨日は無に過ぎなかったのだ
時間がもし存在するとすれば連続や延長ではなく
同一の質の度合いがただ変化するだけ
闇は時間を増し、孤独は孤独を増し
時間という永遠の負のエントロピー
バイパスは遠くへ狭まっていく

街灯の光が消えていく

心も薄れて

ダダの騒音からロシア・イコンに戻っていくように

今こそ宇宙もバイパスが港へ遠く下りていくように

拡張しながら実は収斂していく人間の心の中に

現場から離遊し無意義な知を経て無思慮へ

熱情と愛に灰色を濃く塗り海へ

冷風に送られて小さく

黒紙の点に

何のためにと問うことを止め

闇の中に生を捨てて

海のかなたへ

に

56.11.28

ただ通り過ぎたくて

海の上に、高山の中に、透明だった青空は
季節に濁り紫のヴェールを被った青空に
正午の客の少ない私鉄の車窓から
平年作の稲穂が黄色に眩しく
大地の理髪のように刈入れ後の裸地がところどころ
蓑姿の山人のような棒掛け
百姓に相応しい小柄ながら勇み姿の稲^ゆわ^{いた}ら^たで
子どものように列を成して電車を迎え喜んでいる
遠景に、いつもじっと津軽の田園を眺めている
八甲田が中腹を色染めながら紅葉を知らせている

中野の紅葉には八甲田からの便りはまだ到来していなかった
紅葉の間に清流はまだ夏を残していた
3つの川柳の句碑と2つの左右大臣の像が
三丈不動尊のある信仰と零の禅の世界を一部壊したが
副藩の誇りと悲哀の象徴
堂の上に紅葉林が世紀末の清楚なロシア風景画のように
政も信仰も禅も無縁のように空へ話しかけていた

世俗の喜びである黄色い世界から
大地の懐へと浄仙寺は森林の中に隠れていた

しかし今では車道が開き、

路傍の草花は埃で白く半死している

浄仙寺に辿り着くまでにどれだけ自家用車に

追い越され出合っではこの草も白くされたことだろう

時代からとり残された被害者の沈黙は葉の裏に残っている

路上に一匹の蛇が尾を噛むように円く踏み潰されていた

神の使者も今はタイヤの片の価値もない

南無阿弥陀仏は愛しているよと若者の車が次々走り行く

寺子屋に学ぶ若い人たちは

どんな気持ちでこの道を歩いたのだろう

境内には幾つかの池があり、

池の周囲に酒宴の席が敷かれていた

今の私は池に何を学ぼうか

郷土の文人たちの碑は拓本の紙が貼りつけられていた

地藏堂と不動堂だけが歴史の中に沈黙している

私は何のためにここに来たのだろう

ただ通り過ぎるためだったのか

信仰のためでもない 文学のためでもない

キャンプのためでもない

浄仙寺のすぐ上の黒森山の頂上

登ってみれば、現代の価値の象徴が行く手を阻む

おまえはここから飛んではならない

飛んでいるのは俺だ

おまえなんぞに飛べるものか、帰れ
私は何のためにここまで来たのか
ここもただ通り過ぎるためだったのか
私はどこで何を求めたかったのか
何を求めるにせよ
一日に為せるものは何もないのだ
生涯かけても求めえるものは唯一死のみなのだろう
下山の遠景に八甲田の峰々が夕べに薄く溶け始めていた

57.10.12

無題（闇の桔梗）

碧空に窓を閉ざし
影に体はまどろむ
光を放つ町並に戸は開かず
煙草の煙に霞む

静謐な箱庭の日常
昼食に喉は縮張せず
脳は懶惰に朦朧と
部屋の外だけで時間が動く

離別した友からの紺碧の花瓶に
黒森山で採取した一輪の桔梗
項垂れ紫を闇色に変えいく
密やかに窓より先に帳帷が包み

音楽のない紅葉の茶碗に
部屋の万物の精気は吸引され
暗い空間は点にもならず
肉体よりも先に霊が死す

57.10.18

裏庭の詩

好天に夏を偲ぶ日々
突如の秋雨
繁華街の裏庭に
白菊と栗の葉が吐息をつく
北に遠く雷鳴の破局な急変
裏庭の降雨は
晩秋への皺

雨あがりの午後
灰白の雲脚は淀み
合間から瞬間
黄色い陽光
短かった夏は消えた
裏庭を猫が通り過ぎ
竿竹から雨滴が垂れる

自然への恭^{きょうえつ}悦は終わり
街と自らに傘掛けする
子供たちのかくれんぼの足音
自らの帰路へ逃げ
鬼も探さず家に帰る

雨雲の夕焼けに^{そそのか} 唆 され
目覚めた神隠しの童話

車だけが街を走り
裏庭には誰もいない

ビルだけが立ち並び
雀はすでに飛び去った
季節を見ぬ物体
自然を踏み潰し
夏はただの^{えがき}絵書

生きられる存在は
蹂躪された古道具
生きる物体が
質の破局的急変を支配
心の森が削られては
さらさらと砂漠が広がっていく
早い夕闇に再び雨が降り^{しき}頻る

57.10.20

宵闇の告白

薄優れの陽光
木漏れ日が
机上の植木鉢に
黄金色に光る
白壁に帯をなして

事切れた^{サギソウ}鷺草
薄暑に何処へ飛んで行った
猿賀の神の白い使者
田村麻呂に攻められて
太古に首を縮め飛翔した
生命を土にこもる鷺草

形だけ残した^{オリヅルラン}折鶴蘭
薄幸の一日を何処へ閉じた
平川の田園の守護の神
阿倍曾我氏に住み処を奪われて
翼さ折れ土器とともに埋もれた
心の美を抜かれた折鶴蘭

清潔と進化は

一つ^{しとね}褥から隔て

鷺は空へ

鶴は地中に

太^た刀^ちが切り開いた

神を模倣するかのよう

大地の母を^{とみ}黄泉に獄牢し

父権が地上の自然を司る

地平線を回顧せずに

暮れあい

陽光と闇の

地平線

霊が小振りに震撼する宵闇

内外と男女の

変換する門戸

上下の帰還点

だが

文明は裏返しに進み

変換店に^と停まらず

机上の植木鉢は

影もなく沈黙する

窓の外には闇が降りた
遠くに宵闇の空は
群青色に神秘的に
万物への失恋の情を
ゆっくり瞼を閉じる
大地の晩鐘の余韻が
消える山の端に響いて
机上の植木鉢は
闇の中に沈黙する

57.10.22

花鳥風月

低山にも初雪をもたらした寒波
銭湯からの帰路を急^{せう}かせる
冷たい褥に背は寝返りをうつ
蛇口の滴りと目覚ましの時を刻む音
明日から寒波は遠のき街の晩秋が始まる

物思いの陽光に遠い秋空
生の満ちた季節は
数万年前の過去のように残る
 風が巻いて鳥となり
 水が跳ね返って花となる
万物がいきいきとした季節は
数億年前の過去のように残る
 地が踊って高山となり
 火が渦巻いて太陽となる
現象は輪廻するが
過去は未来にはない
物思いの陽光に遠い秋空
晩秋を引き摺^ずる街中には
古びた一枚の花鳥風月画
蘇生のない半透明の硝子張り

やがてはそれさえ
雪に白く埋もれる

何度もアルバムを開く
回想は不毛からの逃避
季節は一枚一枚捲^{めく}られて
死んでは化石となり
アルバムの先は
白い晩秋のページ

街の晩秋
未^す枯^がれた陽光に
跡^と絶^だえる息吹は
舗道^{ふどう}の一枚の落葉を
記録に残し
低山の影に
消えゆく

57.10.27

3つのヴァリエーション

知を愛さないー反哲学

らなぜな

知は愛される愛を持たないから

愛は常に愛するであり

傍点：愛する

運動ー波動・変形・密度変化…

静は流転を了解できない

知は愛することができないから

知は何らかの対象についての結果であり目的であり

作用や原因ではない

反作用のない愛はない

哲人は私の両肩を抱きながらこう言った

知とは常に知ることなのだよ 傍点：知る

知こそ何よりも愛を動かす第一原因なのだよ

無知と違って、知を愛さないことも一つの知であり

それも愛知のなせる業なのだよ

無知を愛するー対哲学

らなぜな

無知はあるがままのものをあるがままにしておくから

知はある対象や部分についてだけ

分断し捨象しては抽象する

世界や人生、物体や精神はそういうものじゃない
無知は愛の唯一の母胎であるから
知による愛は偏愛であり、差別や拘束を生む
無知は自然のままの人間の平等で自由な愛を生む
知は愛ではなく憎や悪の母胎である
哲人は私の頭に手を載せてこう言った
知こそすべての分離した存在を結合してくれるのだよ
人間の情欲が寸断し差別し拘束を生みだしたものを
知を愛さないのと違って、無知への愛をより知に近づけ
知は最高の愛なのだよ

無知を愛さないー逆哲学

なぜなら
だが、私はとまどった
しかし、知も愛さない
私は再びとまどった
無知を愛することも愛さない
哲人は笑みを浮かべこう言って立ち去った
まず知を捨てよ
知を愛せず無知を愛せよ
そうすれば、無知を愛せず知を愛する

58.12.22

白い天球は公転を忘却したかのように
蒼空に浮く雲の流れを靈魂が密閉し
夜空に輝く星の神秘を靈魂が遮蔽し
浪漫と抒情を詩うはずの降雪と積雪は
地上の自転に垂直に落下公転する雲の塵埃
地上の発芽を水平に延長瀰漫(びまん)する雲の再生
青空、陽光、白雲、^{しらくも}微風、^{そよかぜ}細流、^{せせらぎ}そして小径
その上を更に車が無軌道に蹂躪する
すべてその体感は埋没され持続は生きられず
一であるはずの三十三の生は寸断され蹂躪され

夕闇を早める雲塊に広告燈だらけの雪道を
手当のない残業の帰路を逸れ板金屋へ足取りは重く
原付バイクでぶっつけたバンパーの
三、四センチの二本の傷に
修理代五万八千円支払ったら
貰ったばかりの給料袋に五千円札が一枚残った
朝から晩遅くまで何のために一か月働いたのか
分からなくなって
涙が落ちそうだったので夜空を見上げたら
久々の白い満月が冷たそうに悲しんでいた

労働が社会への貢献のためなら
社会は何のために流動するのか
人類の幸福のためなら ちっぽけなこの人間だって
目覚めて以来 幸福を求めて来たのではなかったか
幸福とは知る喜びを体感することであると目覚めて以来
教師は書物、社会、自然の統一理論でも身体でもない
三者を解体して、超越ではなく根元へと還元する方法だった
書物は労働時間の過剰に疎外され遠のくかぎり
社会派金銭の傀儡となり善は悪の権化となった
そして今自然は美を隠蔽され靈魂と雪塊に密封されている
雪よ降れ降れ 原爆の灰となって、地球の火山灰となって

60.1.21

雪の小径を

街の中に真冬は死んでいた
路上は轍(わだち)が軋(きし)めいて除雪され
白い小径は追憶の中に明滅する
車に寄られ他所(よそ)の庭に目が逃げると
枝木の上に綿雪が降りかかっていた

お互い長靴の路上で出会った同級生
さっと取り出した名刺に＜県某支所長＞と
一方は名刺もない小印刷会社の営業員
営業歴のない遅刻常習犯の新米は
七か月経過しても社保に加入して貰えず
九か月経過しても唯一の通勤手当も貰えず
仕事が不出来なのか退社するのはいつも六時半過ぎ
薄給と小心者のちっぽけな自尊心を慰めるものは
バイクで一時間余の早朝の＜赤旗＞配達員
二時間余の夜の生徒数人相手の学習塾講師
でも3つのクォークが周期的に回転せず
遅配 遅刻常習犯 残され営業マン お待たせ先生
夕食はいつ食べてるの 食後すぐ就寝しないでね
一日の中で、三十分でも読書なりエクリチュールしないと
あなたは生きていないのも同然よ

人生行路への信念と価値の大道への自尊心が泣く
文化的人間 社会的人間 政治的人間をめざしたが
一つ捨てよう 捨てるのは決まっているが
目が泣く妻が泣く私も泣く
無能な人間は捨てるべきものに生きるべきなのだ
初心者マークを付けながら
任意保険未加入の会社の車に乗って
私自身の冬を除雪しよう
四季がどのように崩れ落ちようと

瞬時な存在から実存へ
自己中心性に陥る前に実存から
構造の検閲を経て実在へ
そして実在を自然という存在へ
河、海、雲、雪という一つの存在に
路上を逸れて
雪原に小径を
小径を

61.2.4

緑の U ターン

近くの初秋の低山

谷間^{たにあい}から仰ぐ空は

陽光が透いた羊雲

亀の甲羅模様が陰影なく際限なく

初春に沼の氷が溶けたように

青空が眩しい雪溪のスプーンカットのように

季節を惑わす雲

のんびり明日あたりは小雨になるのか

今は光に満ちているが

今夜は木星とガリレオ衛星は隠れたままか

昼から一瞬に夜へ

そして明日へ

山に来てなぜこうも急ぐのだろう

弱々しく飛ぶ数匹もの紋白蝶

荒れた泉の^{ほとり}辺に立つ地蔵の前で

メナモミにくっついた遺骸

往路で見た最後の紋白蝶だった

谷間の奥に進むと豹紋蝶が二種

焦る^{せわ}忙しなさか力尽きてか

二重の上下運動をぎこちなく繰り返す
アザミやオトコエシの花に止まっては
ゆっくり^{はね}翅を振り
ゆっくり回り込みながら
蜜を探し求めているのだろうか
どれもこれも最後であるかのように

また谷奥へと進む
径傍のススキの帯を通り
時折まだ見ぬナンバンギセルがないかと
数年来の思い草
狭^{せま}まる路面は草に茂り湿り
足先を金蛇がすうっと径をあけ
目の縁が黒い赤茶の蛙がのそり
目指す滝音が聞こえてきたが
弱々しい音だった
溪流のように

両手に重みを覚えてきた画材は
技量なさに風景を創れず
途方に暮れ小石に腰を下ろし一服
妻は屈んで天道虫を眺めている
空から一枚の枯葉が舞い落ちてきた
ボロボロに色褪せた豹紋蝶だった

62.916

青の消滅前

山際^{ぎわ}に真白な雲が浅く
青く澄んだ壮大な秋空
休日だというのに
もう紅葉が麓まで降りて来たというのに
妻は昨日故郷^{きのうふるさと}に戻ってしまった

日曜日おきに一年近くも
見捨てて見捨てられた一人娘は
刻々老いゆき病が深まる母の償いに
病の秘密を隠し続けながら
心の重い笑顔を持って

向こうの空も青いのだろう
茶店で啜るコーヒーは苦く
心は紅葉に焼けながら椅子にへばりつく
行為のない生きられぬ一日
青空が暮れゆく淋しさは宙に浮くやるせなさ

一つの存在の消滅
想念するだけでこうも身震いするものか
宇宙も素粒子も運動しては儚く消える

万物の掟なのにたった一つの存在が
消滅するかもしれぬ青すぎる悲しみ

雲が灰色になっていく
山並の黄葉が赤黒くなっていく
青空が不気味に薄暮れていく
すべてが運動と生を止め
恐ろしげな暮れ残りに星が一つポツンと

思想と感情が音楽に散り
生命が遺伝子の四塩基に解体され
物質のすべてが素粒子だけに炸裂する
パルス波がち切れ光子が散乱し
消滅そして終焉無さえ残らず

62.11.25

いつまでも降りしきり

こんこんと降りしきる
塀を遙かに覆い尽して
曲がり角の街灯に沈黙を落とし続ける
見上げると闇に吸い込まれ
時間が逆行し空間は縮小していく
暖房と電燈を消さずして不意に出歩くも
足取りがおぼつかなく最初の曲がり角
部屋の寂しさに街灯の降雪の淋しさ
見上げたままの目はこんこんと潤む

少年は落下し続ける雪牡丹に興味を覚えていた
青年は降り注ぐ小雪に寂寥と詩興を知った
番いは雪花の舞う甘美な詩情に包まれた
淋雪に妻はいない
日曜は決まって滑るのに
八甲田岩木山そして岩手山駒ヶ岳
グレンデだが山スキーに憧憬しながら
明日は森吉山だったというのに
これほどの積雪に妻はいない
長く病臥する母の枕元で
言葉で笑って心で泣いて

帰る車に乗ったとたん涙をボロボロ流す妻
帰途に滑る気が起こらず私を残して立ち去った妻
深夜青年に戻されて部屋を飛び出したら
数軒先の街灯に雪が降りしきる

こんこんと降りしきる
河川に 湖沼に 大海に
そして風が雲になり 雪になり
こんこんと降りしきる
大気と熱は循環し
動植物が多様な食物連鎖で棲息する森
地形と岩石が劇的に異変する大地
星々が広大に生成流転する宇宙
森羅万象が輪廻する
だがなぜ人のみが
回帰の哲学を持つのみで輪廻しないのか
一回性の生命とは何か
生命の炎が消滅するというのはどういうことなのか
絶対的に存在はすべて生成流転しながらも
永遠に存在し続けるというのに
アトムや素粒子がエネルギーを保存し
エントロピーでさえ
やがて星雲のようにもう一つの宇宙に蘇生するのに
なぜ生命の炎は消滅するだけの宿命なのか

誰もいない部屋の暖房はこんこんと燃えている
誰もいない街灯に沈黙はいつまでも降りしきる
生命もいつまでも...

63.2.20



八甲田 F8

【第三部 大学以前】

春陽

ウーン

朱色の世界にいるのかな

暖かい！

ああ、瞼が重くなる

重くなっていく

.....

ウーン

チュンチュン チチチチチ

ウーン

また朱色の世界だ

暖かい！

ああ、紅色の世界に変わっていく

チュン、チュン、チュン

瞼が開いた

ウッ目が痛い、真っ赤な太陽だ

恐る恐る瞼を

少しずつあけて

空だ、青空だ！

二羽の小鳥が
春の青空を
高く誇らしげに舞っている

ああそうか、ここは屋根の上か

二羽の小鳥は
近づきあったり遠のいたり
少しだがまだ残雪のある
遠くの山に
姿を溶けこませながら
飛んでいく

快く静かだ
暖かい！
また少し瞼が重く鈍くなっていく

犬の遠吠えがかすかに聞こえる
しだいにそれが遠くなっていく

暖かい！
瞼が静かに閉じていく
暖かい！
あたた……………

45.4.9

死相

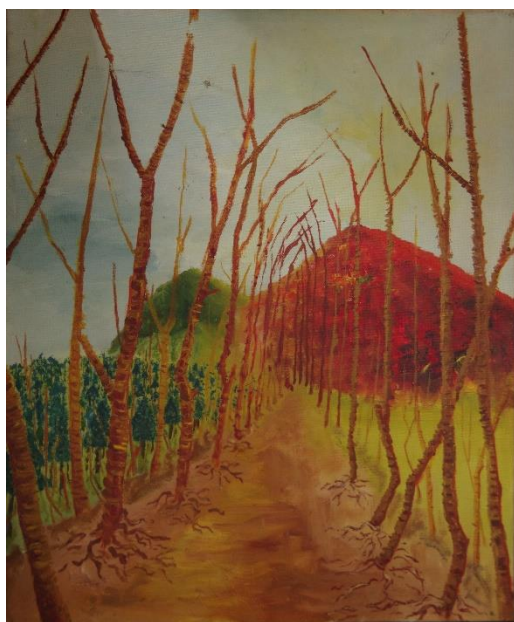
青空が全く窺われない
一面灰白の天空。
しかしながら
ただ異様に明るく
時おり冷風が起こり
起こりては忽然と消える。

異様な雰囲気が漂う陋巷に
みずぼらしい一人の老人が
杖を傍らに
路上の石に腰をおろしている。
身動き一つしないで
不気味な炯眼だけが
只管に空を見上げている。

長く深い沈黙の中に
ただ一度
低いだみ声で
ひとり言のように訥弁する。
死後の世界を模索するように。

ただ異様に明るく
時おり冷風が起こり
起こりては忽然と消える。

45.4.18



裸木 F8

田園

大空の下の広大な田園に
大きなかたまりが一つ
小さなかたまりが三つ
大きなかたまりは動かず
小さなかたまりは動く

小さなかたまりは
田園の土を
懶惰なく掘り上げ
大きなかたまりの上に
間断なく積み上げる
大きなかたまりは
ますます大きくなり
小さなかたまりは
次第に動きが鈍くなる

やがて大きなかたまりが
十分に大きくなると
小さなかたまりは
土を掘る作業をやめ

大きなかたまりと一緒になる

かたまりは

蜿蜒と続く狭隘なでこぼこ道を
道傍の雑草に

「さようなら」を告げながら
元気横溢に勇壮邁進する
僻陬の美しい夕焼けを背に
赤く染められたかたまりは
田園に埋もれている小さな
寒村へと消えていく

寒村から

小鳥の群れが舞い上がり
赤く染められながら
夕焼けへと静かに消えていく

45.4.24

別れ

暗みを帯びた時刻
今にも雨が降り出しそうな空が
辺陬の町の駅の界限を
なおさらに暗くする。
人影の少ない駅の歩廊に
時期おくれの外套を身につけた
瘦躯の若者が
まだ見えない
幼馴染の汽車を待っている。
若者は
一つ前の駅から乗車した
都会へ立つ幼馴染を
ここで見送るつもりなのである。
やがて
若者の分厚い眼鏡に
白煙を吐き出している
黒いかたまりが映り
漸次それが大きくなっていく。
若者は
黒いかたまりが
目睫に停車するやいなや

彼を走りながら探す。

彼の昵懇である女の人も走っている。

若者は彼女と二人で走る。

下車した彼の方で二人を見つけ

「おお！」と美しい白い歯を輝かせ

微笑みながら叫ぶ。

若者は

彼の恰幅のいい肩にき欣然と飛び込み

言葉にとまどいながら

彼に何かを手渡し

別れの握手をかわあす。

彼は彼女に握手を求め

彼女は美しい真白い手袋をとり

優しい白い綺麗な手で応える。

若者は

再び彼と握手をかわそうとするが

彼女の優しい手の温かい感触を

彼の手から奪うことを恐れ

ただ只管に彼に微笑む

短い発車の合図が鳴る。

彼はすぐ入口のデッキに乗車する。

汽車は重い腰を動かし

次第に速くなっていく。

若者と彼女は

彼を見詰めながら汽車を追う。

汽車は忌憚なく速度を増し

彼を引き離していく。

暗みを帯びた空の^{もと}下で

黒いかたまりは

次第に小さくなっていく。

45.5.14

津軽の春

春の公園では
堀は
花の池に
道は
花の絨毯に扮装し
二人の恋人が
桜の花吹雪に包まれ
微笑みをかわし合いながら
幸福に浸って歩いている。

まだ残雪のある岩木の霊峰が
神々しいまなざしを
津軽一面に注ぎながら
春空に高く聳え立っている。

林檎畑は
白い花で飾られ
頬被りをした若い娘たちが
朝早くから
受粉の仕事に精を出している

広大な田園では
間近い田植えに備えて
農夫たちは忙しげに
田園の土を掘り返している。

45.5.20



岩木川と岩木山 F8

老婆

星一つ輝かない深い夜
冷たい静かな風が
屢々陰気な微雨を交えながら
老木の枝垂柳を音もなくゆさぶっている。
暗く荒涼とした墓場で
憔悴した瘦身に
悪臭を放つ襤褸を纏った老婆が
素乱な白髪を靡かせながら
身を縮こませて供物を漁っている。
やっとのところでありついた食べ物を前にした時
藪の中から蹂躞する音がし
老婆は震駭しながら睥睨し続けた。
藪から骨だらけの一匹の野良犬が目睫に現れ
老婆の餌の許に近づいて行った。
老婆は輦蹙し
野良犬を追い払うために石を投擲した。
石は偶然片方の目に命中し
野良犬は悲鳴をあげながら
誤って墓石に突進して行った。
そしてその場に倒れ込んでしまった。
老婆は温情の烏有な目で眺め

野良犬が動かなくなると
ゆっくりと食べ物を食い始めた。
やがて漁ってしまうと
無意味に嘲笑しては嗚咽し続け
訳の分からないことを低い声で訥弁した。
「うう、眩しい！……
太陽め、呪われてしまえ……
ああ、この婆の親愛なる……
親愛なる悪魔よ……
太陽を呪え……
神々を呪え……
すべてを呪え……
破壊してしまえ……
親愛なる悪魔よ……
二人っきりで生きよう……」
陰気な微雨を交えた風のある
まだ暗い夜の墓場で
毫碌した四肢をどうにか働かせて
揺れ動く枝垂柳の下で縊死した。

45.5.20

滅亡

真っ青な空。

どこにも太陽の姿は見えない。

南の空にはしし座が輝いている。

赤い屋根が濡れて光る。

雀が数羽電線に逆さにぶら下がっている。

真昼の鐘が響く。

裏の隘路の真中で頭蓋骨が笑う。

路傍の老木に裸の死骸が吊るし上げられている。

赤い血だけが流れている小川から

異様なせせらぎの音が聞こえる。

暗い部屋の中から幽かに嬰兒の咽び泣く声とする。

一定の間を置きながら

大地のけたたましい亀裂の轟音が聞こえる。

黄と紫に変色する近くの山々。

青空は既に草原のような緑の空に化けて

緑の空を白い大蛇が蠢動している。

天地は吃音しながら

何かに向かって頻りに折檻し始め

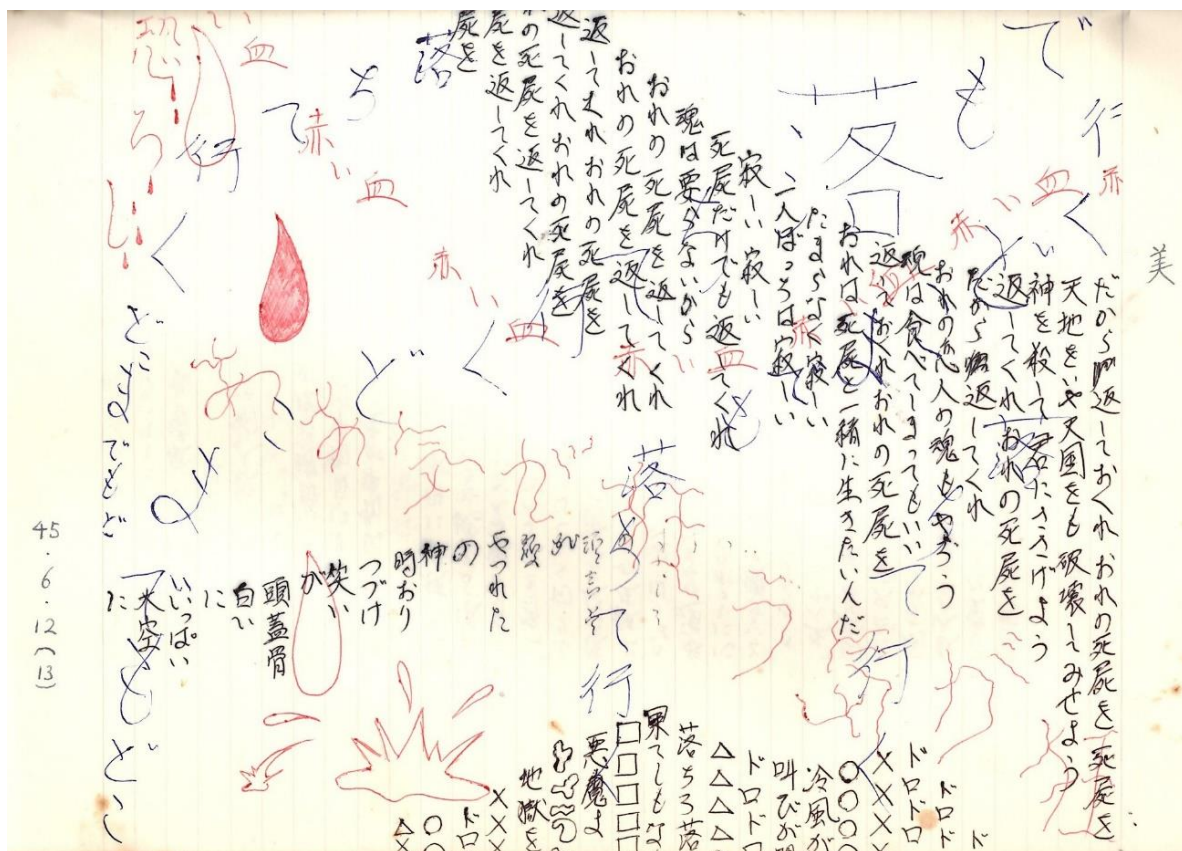
呻吟し昏倒しては吐瀉する。

一瞬、劫火に包まれ何もかもすべてが燃え上がる。

ああ、天地の最後だ…… 、滅亡だ……

45.5.30

美



45.6.12

運命の傀儡

鬱陶しい天間林村の朝。

学童たちが

幾人かの一列縦隊を組みながら

前方から視線をそらさず

ただ只管に

田舎の国道を登校する。

「並んでふざけたりすると危ないから

きちんと一列にね。」

という優しい母の声を

心にしっかりと刻み付けながら

歩道のない国道を登校する。

きょうは近い運動会の総合練習会。

上級生のリーダーが

後に続いて歩いて来る下級生を

ふり向くことなく

「一等を取るんだ。

一等を取るんだ。」

と眼を恍惚とさせながら

元気横溢に叫ぶ・

遠くから自動車が走って来る。

あつという間に自動車は
学童たちの目の前に現れる・
時速八十キロ。
ああ、なんと殺人的なスピードか。
しかも運転手は
長距離運転の疲労のため
意識は朦朧としているではないか。
学童たちは
恐怖に戦き一瞬佇立する。
すぐさまわれに戻って
飛びこむように小川へ逃げる。
おお、神よ、あなたはなんと無慈悲な。
走る凶器は
逃げる学童たちに向かって
突進してしまったではないか。

仕事を投げ捨てて
死に物狂いで駆け込んで来た
農夫の肉親たち。
既に他界した血塗れの我が子を
胸に強く抱き締めて
顔面は泪で覆われ絶叫する。
その傍らで
負傷した学童が

号泣しながら母親に取り繕うとするのを
母親は
唇を震わせ
涙を流れるままに流しながら
頻りに我が子殴りつける。
そして我が子の名を叫び
強く両腕の中に引き寄せ
路上に跪き号泣する。
小川へ撥ね飛ばされた小さな女の子よ。
小さな手で目をこすって啜り泣いている。
可哀想な女の子よ。
母は駆け付けてくれなかったのか。
母は
我が子の椿事をまだ知らないで
我が子のために
一生懸命に働いているのだろうか。
おお、神よ、あなたはなんと無慈悲な。
あなたの力で
母を我が子の許に飛んで来たらしめよ。
それとも母は
もう天に輝く星となってしまっているのか。
おお可哀想な子よ。
命を逃れた運命の殺人者は
両手に覆われた顔を路傍の雑草の中に埋め

跪いて

「畜生！ 畜生！」

と恐懼きようぐの声をあげ

地面を叩き続ける。

悲しきかな学童たちよ。

悲しきかな両親たちよ。

悲しきかな殺人者よ。

悲しきかな殺人者よ。

ああ、悲しきかな人間よ。

ああ、悲しきかな運命の傀儡よ。

45.6.12

初恋のメルヘン

あれは、夏になってまもないことでした。

一人のやせ細った若者が

ある娘に恋をしました。

それは、若者にとって初めての恋でした。

若者はしきりに娘の名を呼び続けました。

娘の瞳を遠くからじっと見つめ続けました。

心の奥から愛をささげようと思いました。

でも娘はある青年に恋をしていました。

娘は、青年と腕を組み微笑み合いながら

若者の前を通り過ぎていきました。

若者を少しもふりむくことなく

通り過ぎていきました。

若者は悲嘆にくれ

くる日もくる日もただ呆然と過ごしました。

若者は青年から娘を奪おうと

懸命に後を追いかけてきました。

日がたつのも忘れ

休むことなく追い続けました。

もう夏も去ろうとしていました。
ただ苦しさ・虚しさがつつのるだけで
どうしても二人に追いつくことはできませんでした。
星空の夜に、一人淋しく
目に涙をいっぱいあふれさせながら
娘への愛に、孤独に、じっと耐え続けました。

道ばたの花になってしまおうと思いました。
娘の綺麗な手に摘まれ
優しい唇に愛撫される
道ばたの花になろうと思ったのです。
ネックレスになってしまおうとも思いました。
娘の胸に躍り
いつまでも一緒に暮らせる
ネックレスになろうと思ったのです。
でもどうにもなりませんでした。
虚しさがつつのるばかりでした。

若者は決心しました。
夏が去っていくように
娘を忘れようと決心しました。
初めての恋を忘れようと。
何もかもすべてを忘れようと。

45.9.7

太陽讃歌

深い秋のあけぼの
天地の創造主 太陽よ
とりまく雲と山に
オレンジ色の無縫な天衣をおおえ
我らが地球の誕生を再現せよ
眠っている大自然に光をさしこめ
この大自然に新しい生命を授ける我らが太陽よ
君は天衣の奴隷ではない
我らが崇める天地の創造主だ
神と君は一体なのだ
乾坤^{けんこん}を清める澄んださえずりを小鳥に
無限に漂う香ばしいかおりを花に
万物を魅了する甘い味を果実に
地上に不滅の美を創造する君よ
君の力は偉大だ
我らに生きる喜びを教え
最も尊い愛を授け
我らを温かく庇護する君よ
少しも自負することなく優しく永久に庇護せよ
我らを傀儡にすることなく喜怒哀楽を共にせよ
天地の創造主 太陽よ
我らが偉大なる太陽よ

45.

朝のシンフォニー

雑草の生い茂る狭隘な道を
有明の月を背にしながら
朝日に向かってどこまでも邁進。
雑草の大きな手には神秘的で透明な宝玉を
いくつも朝日に輝かせながら
埃だらけの靴を洗淨する。
進む方向の反対な農夫が
懸命にリヤカーを引き姿を大きくする。
雑草を蹂躪するにぶい音を響かす車輪。
農婦は、重い相棒を叱責するように力強く唸る。
僕は隘路に立たされたように路傍に寄る。
二人の視線が合う。
逞しい体軀に似ないヒューマニティな瞳。
一言の言葉の闖入もなく通り過ぎる。
僕は後を振り向く。
農婦は力強く邁進。
車輪のにぶい音と農夫の唸りの
互いに助け合うような低い合唱。
合唱は次第に遠くなる。
僕はまた朝日に向かって、邁進、邁進、邁進。
ずっと後を追いかけている黒い僕は

もう大分背丈も低くなったことだろう。
頬にも肩にも温かさ。
数十メートル先に いっせいに飛び立つ野鳩たち。
三十羽に近い彼らは
数羽の白い鳩を護衛するかのよう
「C」や「の」の字を楽しませ
朝日に向かって飛んでいく。
僻陬の朝の新鮮なかおり
一日の始まりのシンフォニー
生命のあるすべての友よ
生きる喜びを謳歌しよう
朝のシンフォニーの讃歌のために
生命あるすべての同胞のために

45.

楽園の夢

黄や橙の衣装で彩られた秋も更けた楽園
芝生だけは、春の誕生日を忘れずに
平和な緑の輝きの中に
新鮮なかおりの中に永久に僕を包む。
いつの日か手のひらくらいの大きな葉に刻んだ
いつも喜怒哀楽を共にする幻影の人の名は
神の温かい御心の目に見えぬ砦に守られた不滅の宝。
黄と白の二匹の蝶が紅葉の木々の間を
追いつ追われつ踊り戯れる。
おお 君たちの歓喜は僕の心を躍らせる。
思いつき手足を伸ばし大の字に仰向けになる。
ああ なんと澄んだ青空だ。
心はますます高鳴り
手も足も鼓動に共鳴し震える。
一瞬にして大空にあの人の笑顔が浮かぶ。
今、何をしているのだろうか。
頬を赤く染めながら恋敵に思いをめぐらしているだろうか。
ああ もしも……
少しでも僕のことを思っていてくれるなら
心ははち切れ蝶と共にこの楽園に溶け
天に舞い上がるだろう。
神の御手にを胸に抱き、跪くであろう。

45.

死園

心の傷をいやす母——楽園よ
あなたは何と深い夜のとばりに包まれているのだ
もう安らかな眠りに落ち入ってしまったのか。
孤独なこの心に優しい言葉を
冷たい涙をあなたの綺麗な手で
ああ安らかな眠りにあなたは
それとも死の園——死神に呪われてしまったのか

街灯よ なぜそんなに冷たい光を放つのだ
季節の神に凍え死ぬ運命も知らぬ蛾たちよ
どんな楽しいことがあってその冷たい光の中を
そんなにも踊り戯れるのか
それとも死への最後の抵抗をしているのか

アポロンの神が歌っている時は
人々の前に愛嬌を披露していたアヒルたちよ
なぜそんなに戦き叫ぶのか
天地の亀裂の声に
この心を破裂させようとするのか

ああ 孤独な白鳥よ

なんと寂しげに飛んでいるのだ
鷺や琴姫のように いっそのこと
黒い雲の牢獄に閉じこめられるがよい
その孤独を払拭してしまえ
ここに一つだけでたくさんなのだ
孤独との戦場は
この胸だけでたくさんなのだ

45.

追憶の楽園

自然の宝を秘めた楽園よ
さあ 夜のとばりが下りた
愛の宝の薫りを漂わせ
夜の精霊たちを目覚めさせよ

芝生の雑草たちよ
この肉体の憩いの場、生きたベッドよ
あの人の名を刻んだ君たちの仲間はどこにいる
傍らに来て あの人の幻を見せてくれ
さあ 一緒に踊り戯れよう

暗闇に白く浮かぶ古城
振り袖姿のあの人よ
琴の調べに流れ浮かべ
袴を身につけたこの心よ
あの人の胸に弓矢を射よう

思い出のベンチよ
あの人の横顔を映してくれ
月の光に輝く堀の鏡に
睦まじく眺めた星空に
あの人の笑顔を映してくれ

45.

3つの無題

無題（孤独）

ここはどこなんだ！

そりゃ おまえ ここはここだよ。

おまえが生まれた故郷じゃないか。

おれの故郷だって、

おれの故郷はどこにあるんだ。

おまえが立っているここじゃないか。

おれはいったいどこに立っているんだ。

おまえが生まれたおまえのこの村じゃないか。

おれが生まれた村だって、

いつ生まれたんだ。

今から幾年前、

おれと同じ年に生まれたんじゃないか。

今、
今っていつのことだ。

現にこうして立っているこの瞬間じゃないか。

わからない。
おれはどこにいるんだ。
今はいつなんだ。

おまえはこうして今ここにいるんじゃないか。

ああ おれはいつどこにいるんだ。

S44.5.3

無題（悲劇）

人間は我々を嘲笑している。
我々には言葉というものがない。
彼らほど大きな頭脳を持っていない。
だから人間は我々を嘲笑している。

人間は悲しい。
彼らは言葉なくしては
心を表現できないのだ。
言葉があるがために
本心のままを表現できないのだ。

なるほど我々の頭脳よりかるかに大きい。
しかし彼らの心の脳は
頭脳の一片にすぎない。
我々の頭脳は心の脳でいっぱいだ。
人間は
心は自分だけが持っているとうぬぼれている。

人間は悲しい。
人間は自分の立場を知らないのだ。

S44.5 月中旬

無題（恐怖）

おまえは笑っている。

はてしもない草原を自由に走り回っている。

おまえは全く自由だ。

だがおれたちはそうではない。

ああ、そんなに激しく走るな。

おまえがころんだらどうする。

おれたちはどうなる。

おれたちの世界はどうなる。

ああ、今度は悲しんでいるのか。

そんなに悲しまないでおくれ。

おれたちの世界の秩序がくるうじゃないか。

おまえたちには想像もできないであろうが、

おれたちの世界はおまえの中にあるのだ。

そうだ、おまえは全く自由だ。

だがおれたちはそうではない。

おまえの動きを息を殺してじっと見ている。

おれたちには恐怖をとりのぞくことはできない。

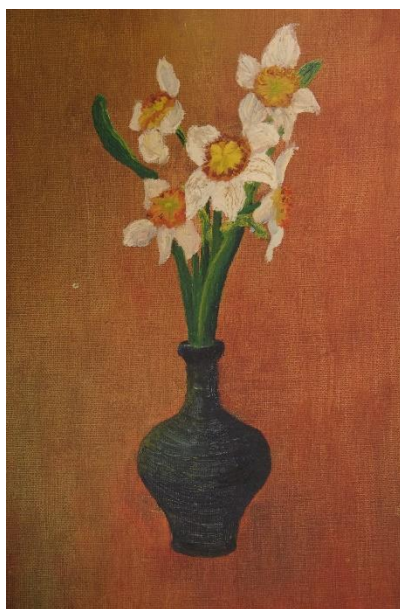
たとえおまえが安らかに眠りについていようと、

おれたちから不安は消え去ろうともしない。

ああ、そんなに笑わないでおくれ。

そんなに悲しまないでおくれ。

S44.5 月中旬



花瓶 F4

あとがき

この詩集は大学時代の 9 編、その後の三十代前半までの 52 編、および高校三年時の 3 編を含む受験浪人時代の 19 編による計 80 編となる。詩集のタイトルはネット詩集としてアップするために付けたものである。サブ HP「クリ・ポエム」では次の下位フォルダーにノートの画像を納めている。

https://kuri-poem.la.coocan.jp/note_jpg/note_jpg.htm

挿絵は若い時の稚拙な油絵であり、R と油絵を教えていただいた親友 T 氏の作品もある。なお、追って amazon から KDP 出版するつもりである。

2001 年に刊行の第一詩集『石ころの詩』の後尾に、大学時代の後半に作成した無題とソネット 18 編を小詩集として上げており、本詩集には上げていない。その他に特に上げたい詩が幾編かあったが、今のところファイルや原稿が見つからず涙を飲んでいる。

詩は高校 3 年時に興味をいだき書き出したものの四編ほどしか書けず、翌年の受験浪人時代にはかなり書いた。ダダや表現主義の詩に影響され、万年筆の他に赤青緑の三色のボールペンを用い、形の崩れた文字の大きさはまちまち、文字の向きもあちこち、詩行は曲線や円を描き。涙や血の記号も付け。そして他に、書いては送った幾つかの失恋の歌、公園でのさすらいや野宿、自己卑下の嘆き節といった詩以前のものが多かった。

大学に入ってから書き出していたが、ようやく自分なりの詩ができたと思ったのは巻頭詩の「美の覚醒」である。大学一年の十二月に、それまでのシュールレアリスムや象徴主義の影響を受け書き出していて、ある日、当時行きつけのジャズ喫茶で聴いた前衛的な曲に驚き、書いている詩と共通性を覚えた。チャイコフスキーの「悲愴」のようなイントロで、不協和

音による混沌の世界であった。マスターに尋ねたら、アート・アンサンブル・オブ・シカゴの「People in Sorrow（苦悩の人々）」という集団即興演奏だった。アパートに帰って夢中になって綴った詩だった。当時はクラシック喫茶にも頻繁に通っていたものの、FM 放送で現代（前衛）音楽を聴くのが一番の刺激だった。現代音楽にも集団即興演奏というのがあって、最初にジャズ・トロンボーン奏者として頭角をあらわしたというヴィンコ・グロボカールのニュー・フォニック・アートとかを知っていたが、レコードを直に聴くのはアート・アンサンブル・オブ・シカゴが初めてであった。衝撃的であった。

そんなことを思いながら、大学卒業後の県職員、大学聴講生、中学校臨時教師、無職、学習塾講師、印刷会社営業員、私立大学事務員時代初めのわずかな作品を辿り、自らの人生を省みている。同時に、探せられない大事なノートも幾冊もあり、失ったも同然の状態に陥ったことを今になって多少悔やんでいる。終活を始め出し徐々に本の整理等をし出しているが、失ったノートや復活できる記録媒体が現れるかもしれない。その際は、大いに本詩集に追加するつもりである。

27 歳で処女詩集刊行の夢もますます遠のくばかりだが、詩誌創刊に関しても同様である。最後に、その詩誌への願望に関する 30 歳の時のミニ記録を、詩誌名を忘れてしまったが上げておきたい。 (2026.1.6)

巻頭詩

詩の光

光と目覚めた時には遅かった

紙片という残債の

人生を区切る紙片の

成人式まで

二十歳の儀式まで

おお ボードレールよ

ランボーを神隠しにして

は おまえ

だった

夢はあまりにも霧

日給で書物を重ねる

二十四のまなざしは

中世への視線をそらし

ああ 朔太郎

だが

変哲のないまなざしだった

<智愛>の末端に触れるかもしれないのに

ここの詩人たちに

は何もできずに

何もしないままに消えていく

詩人を捨て

詩を消して

破片を積み上げる

目尻のしわをふやすように

ド・シロート 1

巻頭言

詩とは、言語ではなく世界を世界の本質に還元した精神と我々は解釈しているが、残念ながら明白に我々はその目標に到達していない。感受性の枯渇、創造力の減退、洞察力の固定化、これらが我々の内容の実態であり、技法の未熟、思考方法の俗化が我々の表現の現況である。だから我々が聖詩として憧憬しているものの一破片でも表現することが、我々の当面の目標である。抒情詩であつたり、生活詩、社会詩であつたりしてもよい。いや我々はそれらにさえ未到達だ。詩に類似した無意義な言語の破片を並立するしかできない。我々が最も憧憬する智愛詩は、我々には地平の彼方^{かなた}なのだ。その影さえ届かない。それでも我々は詩自体への初段階として宙の塵埃を雑草の破片を、そして精神の断片を記述していくのだ。

詩、それは最も遠くにあり、しかもその見えざる手が、精神に覚醒と驚異を与える。詩あるいは詩人、それは他者に存在せず常に自己にしか存在しないものであり、彼とは自己のことである。しかし我々は明白にいわゆる詩人ではない。詩人とは一般的にそう言われて諸先達が詩人であり、また我々自己以外の人間はすべて詩人でもある。ただ我々にとって我々は詩人ではなく、平凡な人間である。我々平凡人は言語を借用して無意義な断片を記述していくだけにすぎない。だから、詩誌といよりも片詩といった方が適切かもしれない。

ド・シロート 2

偶然手にしたあなた様へ

拝啓

私達三人はいつの間にか三十歳になり、これを記念して季刊誌を発行することにしました。私達三人とも学問・文芸に憧憬しているが、しかし皆いずれにも素人であり、文学生であったこともありません。ただ三人とも専門的なことには全く無知ながら詩が好きで、時には下手ながら詩を書くこともあり、ここに詩の季刊誌を発行することになりました。県内には著名な詩誌がかなりあり、残念ながら私達には誰一人として知遇を得ている先達はおりませんが、彼等諸先達の中の数人でも読んでくれるかもしれないと期待と喜びで発刊することになりました。立派な詩誌が多い中、こんな素人の下手な詩誌が誕生するのをどうかお許してください。作品の稚拙さから羞恥心が強いので匿名とし、記号でド・シロート1、ド・シロート2、ド・シロート3と記することも合わせてお許してください。しかし、詩誌として誕生した以上は県内の詩の質を低下させないよう十分努力していく意向であり、これが諸先達への最高の留意だと思っています。尚、三人がここに共に在るのは、＜知＞と＜愛＞の融合した＜知愛＞への憧憬が絆であることも併記しておきます。今後のご指導・ご叱責を何卒末永くお願いいたします。

敬具

ド・シロート3



瀬川紀雄 ネット詩集『若き日の探求』

2026年1月15日アップ